西郷菊次郎の来歴に関する再検討

――横浜・米国・台湾・京都――

佐野静代

1. はじめに

(1) 本稿の目的

西郷菊次郎は、西郷隆盛の奄美大島流謫時代に、龍愛（りゅう・あい）との間に生まれた長男である。後に第二代京都市長となり、京都の近代化、都市基盤の整備に尽くしたことで知られる。西南戦争を生き延び、激動の人生を歩んだ人物として著名であるが、しかしその事績に関する学術的研究は意外に少ない。西郷菊次郎に関する学術論文の多くは、京都市長時代の都市改造事業を対象としており[1]、それ以前の彼の来歴や事績そのものを検証する作業は、まだ十分とはいえないのが現状である。

西郷菊次郎に関する史料としては、鹿児島県立図書館に子孫のもとに伝わった履歴書・辞令類の写しが所蔵され[2]、また別に一部書簡も公刊されている[3]。これらをもとに数種の伝記が刊行されているが[4]、その中で最も詳細な

検討がなされているのは佐野幸夫氏の『西郷菊次郎と台湾』であろう[5]。この伝記は、台湾総督府での宜蘭庁長時代の治水事業などの功績に詳しく、彼の再評価のきっかけをつくった著作といえる。しかし個々の事績の出典が明記されていないことや、下記のような点で、なおも検討の余地が残っている。

西郷菊次郎研究に関する最大の問題点は、これまでの伝記・論文のいずれにおいても、彼の経歴の空白部分を埋められていないことである。例えば、彼が外務省に採用される以前の明治十四年から十六年までの三年間や、明治二十四年に外務省を致仕した後の三年間など、彼の人生には詳細不明な時期がある。また、外国滞在中の事績についても検討が尽くされておらず、特に明治二十年からの二度目の米国留学については、その所属先の大学名や専攻分野などに関してこれまで全く検討されることはなかった。近年注目されている台湾での事績についても、宜蘭庁長となるまでの赴任初期の事績については、ほとんど検証されていないのである。しかし後述のように、この空白の期間には彼のその後の人生に大きな影響を与えた出来事があり、特に彼が明治十四・十五年に横浜居留地に居住していた事実には、重要な意味を見出せると筆者は考える。

このような未検討の時期の足跡をたどることのできる一次史料は、断片的ながらいくつか存在する。横浜時代の活動は当時の英字新聞にも一部記載が見られ、また菊次郎の米国留学に関しては、外務省外交史料館や留学先大学に関係史料が所蔵されている。特に今回、米国で菊次郎の未公開の自筆英文書簡四通が保管されていることを確認した。また台湾では、国史館台湾文献館所蔵の台湾総督府関係文書に菊次郎の台湾における記録が散見される。さらに同時代の薩摩出身者たちの日記や書簡、当時の新聞記事にも、これまで触れられていない菊次郎に関わる記述を見出すことができる。

そこで本稿では上記の史料から、先行研究では未解明の彼の経歴の空白部分を補い、さらに海外滞在中の事績とそこで培った人脈について分析したい。このことは、後年の京都市長着任へと至るプロセスを明らかにすることにつながるからである。以上のように本稿は、これまでほとんど未検討であった西郷菊次郎の横浜・米国・台湾での事績と京都との関わりについて検討する、基礎的な作業ノートといえる。

(2) 西郷菊次郎の略歴

具体的な検討に入る前に、これまでに明らかとなっている西郷菊次郎の略歴についてまとめておきたい。京都市長就任までの彼の半生は、おおよそ三期に大別することができる。

〔第一期〕 誕生から西南戦争後の上京までである(6)。万延二年（一八六一）に奄美大島の龍郷に生まれた菊次郎は、明治二年に鹿児島に引き取られ、明治四年に上京、明治五年二月より開拓使の留学生としてアメリカへと派遣された。明治7年の帰国後には、下野した父を追って鹿児島へ戻り、やがて十七歳で西南戦争に従軍し、熊本攻防の折に高瀬で右足に被弾、膝下を切断する重傷を負っている。官軍に投降し、鹿児島に帰還、その後明治十四年に上京して叔父西郷従道の庇護を受けることとなった。

〔第二期〕 明治十七年からの外務省勤務と、翌年以降のアメリカ滞在の時代である。彼の官歴の始めは、明治十七年の外務省御用掛であり、翌年には米国公使館への勤務を命じられている(7)。明治二十年に依願免官となった後、明治二十三年には宮内省式部官となり、さらに翌年に再び外務省試補・外務省翻訳官に任じられたが、同年中に依願免官となっている。伝記によれば、明治二十年の依願免官から二十三年の式部官登用までの間に、二度目のアメリカ留学

があったとされているが、大学名などの詳細については説明されていない。また国立公文書館所蔵の履歴書には、このアメリカ留学の記載自体がみられない(8)。

〔第三期〕 外務省免官後の鹿児島での生活を経て、台湾総督府で活躍する時代である。明治二十四年の外務省翻訳官の免官後は、三年余りを鹿児島で過ごしたとされる(9)。やがて二十八年四月より陸軍省雇員として澎湖島混成枝隊へ派遣され、五月より台湾総督府の参事官心得となり、さらに七月に台湾南部の安平出張所長を命じられている。翌年四月より台北県支庁長・台北県基隆支庁長を命ぜられ、明治三十年五月に宜蘭庁長となる。臨時台湾土地調査局事務官を兼任の後、明治三十五年十一月に依願免官となっている(10)。

その後、明治三十七年十月に京都市会において市長候補者に推薦され、京都市長に就任する。四十二年に再任されるも、任期途中で病気を理由に退任している。鹿児島での静養を経て、明治四十五年に島津家の永野金山の鉱業館長に任命され、大正九年に退任、昭和三年に六十八歳で死去している。

以上のような彼の生涯の中で最も知られているのは、京都市長時代の事績、すなわち京都三大事業の実施であろう。第二琵琶湖疏水の開削、それによる上水道の整備、さらに市街地の道路拡張と市電敷設という都市基盤の整備は、衰退しつつあった京都を再生させた近代化政策として高く評価されている(11)。その彼の擁立には、かつて京都府知事として琵琶湖疏水事業を推進し、その後も京都の都市整備に心を寄せていた北垣国道の力が大きかったことが重視されている(12)。

この北垣と菊次郎との関わりについては、彼の人生の様々な局面において見出せるものである。例えば、上記の第一期においても、すでにその萌芽が見出せる。そこで次章では、菊次郎の第一期における海外体験およびその後の人

脈形成について分析したい。

2. 明治初期の菊次郎と横浜居留地

(1) 開拓使派遣による留学と北垣国道

明治五年二月、初回のアメリカ留学時には菊次郎はまだ十二歳であった。重視すべきは、この留学が開拓使からの派遣によるものだったことである。北垣国道は、明治四年八月から明治七年九月まで開拓使に出仕している[13]。設立当時の開拓使は、次官黒田清隆の下で薩摩閥が強く、留学生にも薩摩出身者が多かったことが指摘されている[14]。しかし北垣は明治五年三月には黒田不在時の代理に任じられており、実質的には黒田に次ぐ地位にあったため[15]、留学生の選抜にも関わっていた可能性が考えられる。北垣は維新前から西郷隆盛と交流があり[16]、西郷の息子が留学生に選抜されたことを把握していた可能性は高い。

一方、この時期の開拓使には旧幕臣の榎本武揚や大鳥圭介らも出仕しており、北垣とも親交の厚かったことはよく知られている。そのうち大鳥圭介は、この開拓使の留学生派遣に深く関わっていたことに注目したい。開拓使の留学生たちは明治五年二月十八日にアメリカ号で横浜から出航しているが、大鳥圭介は留学生の引率および大蔵少輔・吉田清成の随行員としてこれに同乗していたことが明らかにされている[17]。大鳥は帰国の後、工部省勤務を経て工部大学校の校長となっており、その教え子であった田邉朔郎（琵琶湖疏水および第二疏水の設計者）を北垣に引き合わせる人物でもある。なお榎本武揚も、後に外務省での菊次郎の擁護者として登場することになる。このように開拓使を

通じての大鳥・榎本・北垣ルートの一端に、西郷菊次郎の名前が現れることに留意しておきたい。

西郷菊次郎の初回のアメリカ留学については、その滞在地が重要となる。開拓使の留学生の一行には、菊次郎の従兄に当たる市来宗介や村田新八の息子である岩熊も含まれていたが、伝記によれば菊次郎は市来・村田とともに、フィラデルフィアで生活したとされている[18]。その出典については明らかにされていないが、この時期、同じくフィラデルフィアに滞在していた大久保利通の息子たちの動向が参考となる。大久保の二人の息子、長男利和と次男の牧野伸顕は、前年の岩倉使節団とともに渡米し、フィラデルフィアの中学校に留学していた。牧野の回想によれば、菊次郎との関係について「私とは子供の頃からの友達で、菊次郎も十歳から十二、三歳までの間米国に留学し、米国でも附合い、又米国かに帰って来てから私が英国に行くまで、それから私が帰朝してからも、前と少しも変わらずに交際し続けた」[19]といい、アメリカ留学中にも度々接していたことは確かである。このフィラデルフィアは、アメリカのかつての首都であり、早期から鉄道網の整備された先進的都市として、明治初頭の日本人の留学先に選ばれたものとみられる。

この大久保兄弟の受け入れに際しては、すでに明治三年から当地にあった高橋新吉ら、いわゆる「薩摩辞書」の刊行メンバーが世話係となっていたことが知られる[20]。この高橋新吉は、村田新八とは従兄弟として深い交流があり、その息子岩熊の留学も世話したことを述べている[21]。さらに高橋は、薩摩辞書の刊行には西郷隆盛の力も大きかったとしていることから[22]、西郷菊次郎のフィラデルフィア受け入れに当たっても、同様に窓口になったことが推定される。高橋新吉は、明治九年に開催されたフィラデルフィアでの万国博覧会にも派遣されており、フィラデルフィアとの関わりが深い人物といえる。この高橋は、後にアメリカ領事となり、菊次郎の二回目の米国滞在にも関わっている

点に留意しておきたい。

(2) 中井弘との面識

西郷菊次郎は、明治七年に帰国した後、西南戦争で重傷を負い、敗戦後は鹿児島と奄美で療養につとめている。明治十四年に西郷従道の誘いに従って上京し、その姿が薩摩関係者等の日記に現れるようになる。本節ではこの明治十四年の菊次郎の動向と、そこに現れる人脈について考えてみたい。

この時期の菊次郎については、西郷隆盛の名誉回復を図る勝海舟と吉井友実の日記に登場することが知られている[23]。本稿ではこれらの先行研究に従うとともに、従来見落とされてきた点についても分析してみたい。まず西郷菊次郎の名が最初に現れるのは、吉井友実の『三峰日記』明治十四年八月十五日条である[24]。その前日、西郷隆盛の忠僕であった熊吉が吉井を訪ねてきて、「南洲の子供の件」を相談した。そこで吉井は、その夜西郷従道邸を訪ねるとともに、翌日の午餐に「宮島・中井・西郷菊・大久保利和等」を招いた。「宮島」とは宮島誠一郎であり、大久保利和は前述のように、菊次郎と同じ時期にアメリカに留学し、交流のあった間柄である。

本稿で注意したいのは、ここに同席していたもう一人の人物、「中井」である。これは薩摩藩出身で志士としても知られる中井弘である。維新後は外務官僚を経て後に工部省大書記官となり、工部卿であった吉井と親しく、その日記に頻出する人物である。中井は、明治六年にアメリカおよびヨーロッパ視察に派遣されている。維新以前から西郷隆盛とも接点があり[25]、かつ菊次郎とほぼ同時期にアメリカ滞在していたことから、この席に呼ばれたものであろう。

注目すべきは、中井はこの後明治十七年に滋賀県知事に転じており、それは琵琶湖疏水計画に強く反対した籠手田安定前知事を更迭し、北垣国道と連携して疏水事業を推進するための伊藤博文らによる登用だったことである[26]。中井は北垣の盟友として深い交流を重ねているが、その後明治二十六年には中井自身が第五代京都府知事となり、平安遷都千百年紀念祭、第四回内国勧業博覧会、京都舞鶴間鉄道建設という「京都三大問題」に取り組んでいる。翌年、中井は在職のまま急死するのであるが、しかしこれら大事業の成功への道筋を整えた手腕は高く評価されている[27]。周知のように、明治三十七年より京都市長として菊次郎が手がけることとなる「京都三大事業」とは、この中井の「京都三大問題」をふまえて命名されたものであり[28]、市制特例期の京都市長をも兼ねていた中井の事績を意識したものともいえる。その中井と菊次郎の間に直接の交流があったことを示す点で、注目すべき記事といえよう。

なお、この明治十四年の菊次郎の姿は、他の薩摩関係者の日記中にも見ることができる。『樺山資紀日記』の明治十四年十月二日条には、「王子村制紙社ニ赴キ縦覧」、「藤島正健誘導、西郷菊次郎並文蔵・荒川同行」とある[29]。この当時の樺山資紀は警視総監の地位にあり、同日記の前日条に、「贋札犯人供出機械等点検。精工ヲ尽シタリ（中略）印刷局長来庁点検アリ」とあるように、贋札問題への対応を迫られていた。「印刷局長」とは、同じ薩摩出身の得能良介である。当時王子村には日本最初の洋紙工場と、それに隣接して印刷局の印刷所があり、「誘導」の藤島正健とは紙幣寮勤務経験のある大蔵官僚であった。この贋札事件と関わって洋紙製造の視察が行われたものであろう。

また同行者として文中に「文蔵」とあるのは、樺山資紀の甥に当たる橋口文蔵である。後に札幌農学校長となる橋口文蔵は、この年留学先のマサチューセッツ農業大学から帰国したばかりであった。洋紙の製造技術が関係する事件のため、これら洋行帰りの二人を伴ったのであろうか[30]。樺山資紀は西郷隆盛の幼なじみであり、菊次郎を後見する

立場にあったとみられるが、この樺山資紀と甥の橋口文蔵については、後に菊次郎の台湾総督府への赴任に際しても関わりを持つことになる点で注意したい。

(3) 横浜居留地におけるファブルブラントとの関わり

従来の研究では、この明治十四年から三年ほどの間、菊次郎は東京永田町の西郷従道邸に滞在したとされる。しかし実際には、この時期の菊次郎は、横浜の居留地で生活していたことを以下に示したい。この横浜での経験は、彼の後の人生に大きな影響を及ぼしたと考えられるからである。

菊次郎の横浜居住について記すのは、明治十五年三月四日の「東京日日新聞」である。

兼て横浜本町五丁目七十三番に寄留する鹿児島県士族にて、同港郵便局在勤の高橋良教氏に同居せらるゝ西郷菊二郎(ママ)氏は、何か都合ありてか一両日中本町通居留地八十三番館仏人某の許へ転寓せらるゝよし、又本年一月に同氏の許へ来りたる名刺の数は、内国にて八百余、海外より七百余、都合千五百余枚なりしよし、以て氏が交際の広きと亡父が名望の猶今日に存するを見るに足るべし。

文中の「同港郵便局在勤の高橋良教氏」とは、明治十年に大蔵省関税局御用係としてアメリカに留学し、後に駅逓官や逓信参事官を経て、横浜郵便電信局長や逓信省会計局長などを歴任する人物である(31)。注目すべきは、彼が明治十二年に「亜米利加合衆国ヘンシルヴエニア洲ヒラデルヒア府人ヂーベークエル、オルプ次女、アナ、ニートン、オ

ルプ」と国際結婚していることであり、その願書には「鹿児島県士族高橋良顕四男」とある[32]。したがって高橋良教とは、高橋新吉の弟であったことが判明する。菊次郎のフィラデルフィア留学時に窓口となった高橋新吉が、横浜居住に際しても仲介役となっていた可能性が推測される。

菊次郎はさらに居留地のフランス人のもとに転居するわけであるが[33]、その理由は何だったのだろうか。手掛かりとなるのは、かつて村野守治氏が紹介した西郷従道より菊次郎宛ての五通の書簡である[34]。これらは、横浜居留地の外国人である「ファブール」「ショネノ」や「サラヘル」らとの交際に関わって、横浜在住の菊次郎に手助けを求める内容である。いずれも年不詳であるが、村野氏はこれを菊次郎が外務省に勤務した時期、すなわち明治十七年のものと推定している。しかし以下の考証によって、これらは明治十四・十五年の書簡であることが判明する。

村野論文で番号20とされる従道の書簡は、十一月三日付けで、「其地之競馬も已ニ明日ニ相成候得共いまた医師より他出差留られ、此度ハ乍遺憾出濱いたし難く御座候間、何卒貴公よりファブル様并ショネノ様江も申上候様御伝声被下度」とある。「出濱」とあることから「其地之競馬」とは居留地近くの横浜根岸の競馬であることがわかる[35]。明治十年代で横浜競馬が十一月四日に行われているのは明治十四年に限られることから[36]、この書簡は十四年のものであり、この時点で菊次郎が横浜に居住していたことが判明する。同様の考証は、番号23の十一月十七日付け書簡についてもあてはまる[37]。

さらに注目されるのは、番号19の十一月十三日付け書簡である。従道は「今日者横浜へ罷越候而ファブール君江直に御悔可申述含に御座候処、公用多岐」につき、同封の書状を手渡すように菊次郎へ依頼している。他の書簡にも頻出する「ファブール」「ファブル」とは、横浜居留地のスイス商人ファブルブラント（James Favre-Brandt）であり、

後述するように西郷家や大山巌とは幕末以来長く交流があった。ファブルブラントの妻であった松野久は明治十五年十一月八日に死去していることから[38]、書簡はこの葬儀にかかわるものと推定される。よって明治十五年の十一月段階でも、菊次郎が横浜在住であったことがわかる。

重要な点は、その宛先の住所である。表書きは「横浜外国人居留地山手ノ弐百四十一番地サラベル氏内　西郷菊次郎殿」となっている。この山手居留地241番のサラベル氏宅とは、当時の Directory によれば “Bay View House Academy” “Mons. X. Salabelle” となっており[39]、サラベル学校とも呼ばれた私設の語学学校であった[40]。サラベル学校では、サラベル夫人が主に外国人生徒を対象にフランス語を教えており、校内はフランスで過ごすのと変わらない環境であったという[41]。菊次郎はフランス語の習得を目指して、ここに寄宿したことになる。

この間の事情について、平野光雄氏によるファブルブラントの伝記に注目すべき記述がある[42]。ファブルブラントは一八六三年の来日以前には、スイス射撃隊の下士官であり、幕末には大山巌を通じて薩摩藩へ銃器を供給するとともに、藩兵の射撃指導にもあたっていた。これを契機として西郷隆盛とのつきあいが始まり、その息子の菊次郎を「我が児のように可愛がった」という。菊次郎は、西南戦争後「難を遁れて暫く横浜租界のファブル商館にかくまわれ」、後に「ファブルの世話で同地のサラベル学校（仏人経営）を卒業し、更にアメリカに留学した」とされている[43]。この伝記は、昭和期のファブルブラントの四男からの聞き書きによるものであり、その利用には慎重さが求められるが[44]、しかし菊次郎とファブルブラントとの間に個人的なやりとりがあったことは、明治二十年にファブルブラントが米国滞在中の菊次郎に書簡を送っていることからも明らかである[45]。さらに、この横浜居住時代にすでに両者に親しい交流のあったことは、当時の一次史料から裏付けることができる。

それは横浜居留地で発行された英字紙 The Japan Gazette の記事である。そこには、明治十四年十月二十一日に開催された横浜のスイスライフル協会射撃大会の結果が掲載されており、第1カテゴリー競技の優勝者としてファブルブラントがあげられるとともに、第2カテゴリーの第三位に、Mr. Kikujiro の名がみえ、“Mr. Kikujiro, a young man of 20 years age, is the son of Saigo Takamori”との注記がある(46)。スイスライフル協会は横浜居留地のスイス人から構成されており、ファブルブラントはその会長であった。この協会の射撃会に参加を許された日本人としては村田銃の発明者、村田経芳が知られているが、その前年十月に行われた競技会では村田は第七位であり(47)、続く八月の第二回競技会では優勝している(48)。この記録と比較しても、菊次郎がライフル射撃について相当の腕を持っていたことが理解される。西南戦争時の訓練だけでなく、横浜に来てからのファブルブラントとの交流の一端が垣間見える記事といえよう。

このように、菊次郎が明治十四・十五年の横浜居留地に滞在していた事実は、重要な意味を持つと筆者は考える。この時期の横浜ではコレラが大流行しており、その対策として近代水道が計画された年代に当たるからである。江戸末期に日本に入ってきたコレラは、横浜では明治十、十二、十五年に猛威をふるっており、明治十四年には The Japan Gazette 紙上に「横浜の給水問題」が掲載され、居留地の水源である浅井戸の汚染が大きな問題とされている(49)。特に明治十五年のコレラパンデミーの際には、七月の条約改正予議会において英国公使パークスが横浜居留地の外国人三百名余の署名・建言書を提出し、水道の敷設を強く迫っている(50)。日本側はこれを条約改正にかかわる問題ととらえ、水道設置を確約したことから、以後水道計画が具体化していったのである。この時期に居留地で生活していた菊次郎は、以上のような経緯を間近で体験していたと考えられる。

この結果、明治二十年に日本最初の近代水道である横浜水道が竣工するのであるが、これ以降各地に設置されていった近代水道は、函館・長崎・大阪・神戸など、開港場・開市場の地からはじまっていることを指摘できる[51]。このような横浜の開港場での伝染病流行による水源汚染と、外国人居留地の衛生環境整備についての経験は、その後の菊次郎の人生にも影響を及ぼしたと考えられるが、この点については第4章にて詳述することとしたい。

3．ジョンズ・ホプキンス大学への留学に関する新知見

(1) 再渡米と三島弥太郎との交流

本章では菊次郎の半生の第二期のうち、明治十八年からの米国公使館勤務と、さらに二回目のアメリカ留学の実態について明らかにしたい。特に留学先については従来の伝記等では全く未検討のため、これまで知られていなかった史料も用いて分析を試みたい。

まずは前提として、菊次郎の再渡米の経緯について確認しておきたい。渡航時には、彼の弟でドイツ留学を命じられた西郷寅太郎（隆盛次男で嫡子）と、彼らの従兄弟にあたる西郷隆準（隆盛の弟吉次郎の長男）とが同行していたことが松浦玲氏によって明らかにされている[52]。その経緯として、まず明治十七年四月、寅太郎に天皇下賜金によるドイツ留学の話が持ち上がったが、彼は当初政府側への反発もあって返答を保留し、いったん鹿児島に帰郷した。十二月に再度上京して留学の意志を示したが、ただし従兄弟の隆準も伴いたいとの希望を出す。勝海舟・吉井友実らはそのために奔走するが、この寅太郎たちの留学実現のプロセスには、菊次郎も深く関わっている。

松浦氏がすでにまとめているように[53]、明治十八年一月十二日、菊次郎に対し在米公使館勤務の辞令が下ると、その翌日に寅太郎は海舟宅を訪ね、自分と隆準が菊次郎の渡米に同行することを相談する。十四日には、菊次郎自身が海舟宅を訪問し、同様の依頼をする。海舟は「吉井へ談ずべき事共なり」として、すぐに吉井宅へ向かい「早々談」じたとされる。ここで本稿では、当日の吉井友実の日記に注目したい。

この十四日、海舟は急に思い立って吉井宅を訪問したのではない。海舟の四日前の日記に「吉井より、来る十四日招かる」とあるように、そこでは「近衛篤麿殿近日訪欧に付、送別会」が開催されたのであり、参集者は「勝、税所、西郷兄弟、北岡等」であった[54]。つまり海舟は菊次郎と連れ立ってこの会に向かったのである。近衛篤麿の欧州出発は四月十九日であり[55]、送別会としてはかなり早期の開催といえる。同じくドイツに向かう寅次郎を、島津家と縁の深い近衛家の次代当主に引き合わせようとする吉井らの配慮だったのだろう。篤麿はこの後三月の書簡で、寅太郎とのドイツでの交誼を望む旨を吉井に示している[56]。

なお当日の会では、西幸吉が薩摩琵琶を弾じたことも記されているが、海舟によれば「西は、南洲死時に側〔に〕在りし人」である[57]。篤麿が主賓の会とはいえ、西郷兄弟を意識した場であったことがうかがえよう。なお、もう一人の隆準の留学をめぐっては、この九日後、西郷従道が費用を負担することで実現の運びとなっている[58]。

さらに、松浦氏の研究では、海舟の日記および海舟宛ての菊次郎・寅太郎・隆準連名書簡によって、この三人が二月十九日に出航し、三月十六日にワシントンに到着したことが明らかになっている[59]。本稿では、その後の彼らの足取りについて記す史料に注目したい。それは当時アメリカに留学中であった三島弥太郎の書簡である[60]。

三島弥太郎は薩摩藩出身の三島通庸の長男であり、菊次郎より六歳下の慶応三年（一八六七）生まれである。駒場

農学校卒業後の明治十七年九月に渡米し、翌年マサチューセッツ農業大学に編入、二十一年の卒業までに家族宛ての書簡を多数残している。三島通庸は西郷隆盛の引き立てによって名を成したことから、息子たちも親しく交際しており、書簡からアメリカにおける菊次郎とのやりとりを知ることができる。

弥太郎の第一信によれば、菊次郎は大久保利和とともに明治十七年九月十四日の弥太郎の出発（九鬼隆一公使と同船）を横浜まで見送りに来ている。翌年二月、菊次郎自身が米国に向けて出航するが、弥太郎の明治十八年三月二十六日付け書簡には、「西郷菊次郎さま方」が去る十六日にワシントンに到着したこと、しかし多忙らしくまだ会えていないことが記されている。

一方、菊次郎自身の筆になる前述の三月二十六日付け勝海舟宛て連名書簡によれば、三月十六日の「当府安着」の後、「小生共儀も二十二日よりベルツ学校と申す処へ語学稽古之為め通学罷在候」として、彼らがワシントン付近の語学学校に入学したことがわかっている。菊次郎はそのまま公使館勤務に入るわけであるが、残る二人の消息については、三島弥太郎の十一月七日付け書簡から知ることができる。そこには「西郷寅太郎さまと隆準さまは、先日欧州へ参られ」とあり、寅太郎らが秋までアメリカに滞在していたことが判明する。彼らはプロイセンの陸軍士官学校に向かう前、アメリカで七ヶ月ほどドイツ語の準備を行っていたことになる。寅太郎はこの後明治二十七年まで留学を続けるが[61]、彼ら三人の名はこの約十年後、台湾において再び揃うことになる。

(2) 大島仙蔵とモリス家

三島弥太郎の書簡によれば、彼がアメリカにおいて菊次郎と再会できたのは、明治十八年四月二日、フィラデルフ

ィアでのことであった。弥太郎は九月にアマーストのマサチューセッツ農業大学に編入するまで、このフィラデルフィアの中学校マウント・アカデミーに在籍していたが、そこはまさしく大久保利和・牧野伸顕・村田岩熊らが通った中学であり、その時と同様にこの中学校を弥太郎に推薦したのは、今回はアメリカ領事として赴任中の高橋新吉であった[62]。

菊次郎は再渡米の翌月に、自分もかつて滞在したフィラデルフィアを訪ね、弥太郎の下宿先に一泊している。注目したいのは、その翌日に彼らが連れ立って、当地の「大島氏」の病床を見舞っていることである。この「大島氏」について弥太郎は、「鹿児島県大島の人、工部大学を卒業して当地へ実地研究のために来ており、大山陸軍卿のお引立てにあずかっている人」と注記している。これは奄美大島出身の大島仙蔵のことであろう。

大島仙蔵とは奄美初の学士で、鉄道技術者となった人物である。名瀬に生まれ、奄美大島の代官であった伊東仙太夫に見出されて明治四年に島を出て、鹿児島の本学校に入学した。明治八年、帰省中の大山巌の目に止まり、上京して工部大学校へ入学、明治十五年には土木科を首席で卒業している。卒業と同時に同校の助教をつとめたが、明治十六年にアメリカへ留学、フィラデルフィアのペンシルベニア鉄道会社にて実地研究にあたっている。明治二十年に帰国、日本土木会社を経て山陽鉄道会社の技師長兼建築課長に招聘されたが、明治二十六年に三十五歳で病没している[63]。

大島仙蔵は鹿児島時代から奄美出身の異才として有名であり、工部大学校在学中には西郷隆盛の落胤とも噂されたという[64]。西郷家の親戚である大山邸に寄宿しており、また大久保利通邸にも親しく出入りしていたことから[65]、菊次郎とも同じ奄美出身者として旧知の間柄であったと考えられる。なお、仙蔵は工部学校の第四期生にあたるが、同

じ土木科の一年下には田邉朔郎がいた。彼らが懇意にしていたことは、仙蔵の急逝後に設けられた遺児の義援金募集の発起人のうちに、田邉朔郎の名があることから明らかである[66]。

この大島仙蔵のアメリカ留学については、「大学当局や米国公使等の懇切なる斡旋による」とされているが[67]、工部大学の後輩たちは彼のアメリカでの様子を、「高橋領事より吉井社長への寄書中にて承知仕候」としている[68]。したがって仙蔵のフィラデルフィア滞在にも、やはり高橋新吉が関与していたことが判明する。高橋はアメリカの鉄道事情に通じていたことでも知られる人物である[69]。

ここで、大島仙蔵の派遣先がフィラデルフィアのペンシルベニア鉄道会社であったことに注意したい。当時、この鉄道会社の重役であったウィスター・モリスがフィラデルフィア近郊に邸宅を構えていたが、彼こそは日本人留学生たちに多大な援助を与えたことで著名なモリス家の当主であった。大島仙蔵は滞米中にこのモリス夫妻の厚遇を受け、「まるで実の子のように」接してもらったという[70]。

富裕な実業家であり、かつ敬虔なクエーカー教徒であったモリス家では、毎月第一土曜日に聖書の集会と晩餐会を開き、多数の日本人留学生を招待していた。モリス夫人のメアリは、津田梅子や新渡戸稲造、内村鑑三らを支援していたことでも有名である[71]。このモリス家の日本人留学生への支援活動は、新渡戸や内村を迎えた明治十八年（一八八五）頃から本格化したとされるが、大島仙蔵のモリス家とのつながりはそれに先行するものであり、初期の日本人留学生とモリス家との関係を示すものとして注目されよう。

三島弥太郎も明治十八年以降このモリス家の集会にしばしば参加しており、ここで多くの留学生達と交流し、キリスト教へと傾倒していく様相が認められる。彼の書簡中には、東京の有馬学校での同級生でもあった内村鑑三や、そ

の親友で当時太田姓を名乗っていた新渡戸稲造らの名前も登場する。また、高橋領事夫妻がモリス邸に滞在したことも記されている[72]。

菊次郎自身がこのモリス邸に出入りしていたかどうかは明らかではない。しかし親しかった大島仙蔵や三島弥太郎、高橋領事らを通じて、モリス家に集う新渡戸ら留学生の情報を耳にしていた可能性は高いと推測される。

(3) ジョンズ・ホプキンス大学留学と新渡戸稲造との関係

渡米直後の菊次郎について、一八八六年発行のCongressional Directory[73]には、ワシントンの公使館勤務の日本人のうちに「Mr. Kikujiro Saigo, Attaché」とあり、その居住地は「17 Iowa Circle」とされている。公使館の同僚として赤羽四郎と三崎亀之助、後に首相となる斉藤実（留学兼駐在武官）らの名前がある。

菊次郎はこの明治十九年三月に交際官試補に任じられたが、翌二十年六月三十日にはそれを辞し、国立公文書館所蔵の履歴書ではこの後明治二十三年まで空白の期間となっている[74]。しかし外務省外交史料館所蔵の諸記録によれば、この間は公使館勤務の身分のままで、留学に切りかえとなっていたことが判明する。

外務省外交史料館には、明治二十年五月付で九鬼隆一公使から外務大臣あてに、菊次郎の官費留学生への採用を願い出た際の関係書類が残されている[75]。そこでは高橋前領事にも問い合わせた上で菊次郎の人柄や能力について述べられており、資質温厚であることや、「本人ハ英語ニ長ジ、仏語モ亦少シク学習致シ」、「其英語之音調ノ如キハ日本人中稀有ノ善ナルモノ」であり、このまま米国に留学し、英語英文に通じた上で「米国公法中殊ニ外交ニ緊急ナルモノヲ学習致シ度」志願したことが書かれている。九鬼の文案では、フランス語の能力に関連してか、白耳義国（ベル

ギー）への留学の可能性についても言及されている。このような九鬼の強い推薦によって、菊次郎は明治二十年七月一日より三年間の官費留学生の資格を得ることができたのである。

さらにこの史料中には、先行研究では全く触れられていない菊次郎の留学先大学に関する記述がみられる。明治二十二年七月九日付けの陸奥宗光公使による報告中に、菊次郎について「留学拝命後ハ、ボルチモール府ジョンス・ポプキンス大学校ニ於テ、只管政治及歴史ノ両学科ヲ専脩罷在」「今一ヶ年ヲ以テ卒業すへき筈ノ由」とある。このジョンズ・ホプキンス大学の政治・歴史学科とは、新渡戸稲造の在籍した学科であったことに注目したい(76)。

ジョンズ・ホプキンス大学とは、一八六七年に創設されたアメリカ初の大学院大学である。なかでも、ハーバード・B・アダムス（政治学）とリチャード・T・イーリー（経済学）を擁する歴史・政治学科は有名であり、特に大学院生を主体とする二人の合同ゼミは、第二八代大統領となるトーマス・W・ウィルソンが在籍するなど、多くの注目を集めた(77)。このゼミには札幌農学校を卒業した佐藤昌介が一八八三年に入っており、その誘いによって一八八四年から太田（新渡戸）稲造が進学していた(78)。その後一八八七年には、同志社を経てオベリン大学を卒業した家永豊吉も当ゼミに入っている(79)。

西郷菊次郎がこの歴史・政治学科に入った時期は不明であるが、大学側に残る在籍記録によって、一八八七年の第一学期から一八八九年の第一学期までの学生名簿に記載のあることがわかった(80)。指導教授はアダムスで、下宿住所は615 St. Paul St. となっている。彼の位置づけはこの間ずっとspecial studentsであり、大学院生であった佐藤・新渡戸・家永とは異なり、ゼミの履修はみられない。しかしアダムスとイーリーの講義を中心に、第1表にみるような授業を受講していたことが確認できる。英文学や歴史科目の履修が多く、彼の関心の在処をうかがうことができよ

う。

家永豊吉に関する太田雅夫氏の研究によって、一八八九年四月段階でジョンズ・ホプキンス大学に留学中の日本人の名前が明らかになっている[81]。この時点ですでにPh.Dを取得済みの者は、久原躬弦、箕作佳吉、元吉勇次郎、佐藤昌介の四名であり、当時在籍中の者としては下記五名が上がっている。

家永　豊吉　哲学士　一八八七年オベリン大学、歴史・政治の大学院生

太田　稲造　理学士　日本、札幌農学校助教授――休暇で不在

西郷菊次郎　日本公使館員　ワシントンD.C、歴史・政治の特別学生

下村孝太郎　理学士　一八八八年ウスター理科専門学校、化学の大学院生

渡瀬庄三郎　理学士　一八八四年札幌農学校、一八八六年東京大学、一八八八年大学奨学生、一八八八

第1表　ジョンズ・ホプキンス大学で西郷菊次郎が履修登録した授業名

	第1学期	第2学期
1887-88年	Elizabethan Literature : Nineteenth Literature Elizabethan Literature :（P.H.E.） Oriental History（P.H.E.course） Europian History（P.H.E.course） Elocution	Fourteenth and Nineteenth Century Literature English Literature :（P.H.E.）
1888-89年	Minor French Church History Elements of Political Economy Oriental History Elocution	Minor French Church and Empire Elements of Political Economy Continental History
1889-90年	International Law　※ Political Economy :（Advanced）　※ English Constitutional History　※ Logic :（L.E.P.）	

濃い網掛けはアダムス、薄い網掛けはイーリーの担当授業を示す
※家永と同クラスでの履修科目

―八九、生物学特別研究生

これを見ると、当時のジョンズ・ホプキンス大学への留学には、佐藤昌介・太田（新渡戸）稲造・渡瀬庄三郎らの札幌農学校出身―東京大学ルートと、元吉勇次郎・家永豊吉・下村孝太郎らの同志社出身―アメリカの大学卒業者という二つのルートが存在したことがわかる[82]。この二つのルートをつなぐ役割を果たしていたのが新渡戸であった可能性のあることに注目したい。例えば新島襄が一八八五年にジョンズ・ホプキンス大学を訪れた際には、新渡戸はキャンパスを案内し、学長ギルマンらとともに会食している[83]。さらに新渡戸は、同志社を代表する文化人である徳富蘇峰とは東京英学校時代の同級生であり、この蘇峰は同志社時代の最も親しい友人として、杉田（元吉）勇次郎・辻（家永）豊吉の名をあげている[84]。これらを勘案すれば、新渡戸が当大学の日本人ネットワークの結節点にいた可能性が出てくる。

新渡戸は学位取得前の一八八七年に札幌農学校助教授となり、その官費派遣としてドイツのボン大学へと留学先を変えたことから、ジョンズ・ホプキンス大学での滞在は一八八七年五月までとなっている。したがって一八八七年七月より官費留学生となった菊次郎とは、在学期間は二ヶ月の差で入れ違いである。しかし今回、菊次郎はすでに一八八七年四月段階で、ジョンズ・ホプキンス大学付近の下宿 615 St. Paul St. を確保していた事実を確かめることができた[85]。よって、新渡戸と菊次郎の間には直接の接触があった可能性が出てくる。そこで新渡戸側の史料を調べたところ、一八八七年十一月にドイツからアダムス教授に宛てた書簡中に、日本人留学生たちの消息を知らせてくれたことへの返信として、“Saigo, I know, having met in Washington” とあるのを見出した[86]。やはり菊次郎と新渡戸は直接の

面識があったのである。菊次郎は米国公使館在勤中から、新渡戸を通じて本学の政治・歴史学科の情報を入手していたと推定される。

(4) 留学時代の人脈形成と自筆英文書簡による新知見

菊次郎と同時期に同じ歴史・政治学科に在籍していた同志社出身の家永豊吉は、同クラスでの履修もみられることから、留学生仲間として最も近い存在であったと考えられる。家永の博士論文のテーマは日本の憲政史であったが、一八八九年二月にはジョンズ・ホプキンス大学に日本公使館より大日本帝国憲法の英文公式副本が寄贈され、これを受けて四月十七日、当大学では日本公使陸奥宗光らの臨席のもとに、大日本帝国憲法発布記念祝賀会が開催されている[87]。これは家永の研究テーマとの合致性とともに、菊次郎の公使館ルートが存在したからこそ実現した催しといえよう。席上では菊次郎による当大学日本人留学生の紹介があり、アメリカ側の専門家の講演に続いて、家永がメインスピーカーとして憲法制定に至るまでの日本の政治的変化について講演している。式典後は図書館に会場を移し、「目下同大学ニアル西郷菊次郎君ノ会主ニテ日本ノ茶会ヲ開キタル由　菊次郎君ハ西郷隆盛ノ長男ナル由ニシテ同氏ノ在学アル事ニ依リ一シオノ興ヲ増シタル由」を、家永は親友の小野英二郎に書き送っている[88]。

太田雅夫氏によれば、九州柳川の家永家の養子となっていた豊吉は、本姓を辻といい、広島藩家老の辻維岳の庶子であったとされる[89]。辻維岳は、薩長芸三藩同盟の締結や大政奉還に活躍した人物であり、西郷隆盛とも交流のあったことが知られている[90]。菊次郎がこのように異国で親子二代にわたる交友を深めていたことは興味深いが、この家永豊吉とさらに新渡戸稲造は、後に菊次郎とも重なる時期に台湾総督府へ赴任していることも注目されよう[91]。

菊次郎がこの留学時代に、もう一人の同志社関係者ともつながりを持ったと推定されることにも注意したい。菊次郎・家永豊吉と同時期にジョンズ・ホプキンス大学で有機化学を専攻していた下村孝太郎は、家永と同じ熊本洋学校の出身であり、両者は以前から親しい間柄にあった[92]。家永を通じて、菊次郎は下村とも面識を持ったことが推定される。その後下村は新島襄に請われて明治二十二（一八八九）年十二月に帰国するが、二十四年七月には北垣国道の娘（養女）徳子と結婚しており[93]、明治三十七（一九〇四）年三月には同志社社長（総長）となっている。後年の菊次郎の京都時代へと続く人脈が、このジョンズ・ホプキンス大学時代にも見出せることに注意したい。

さらに今回の調査で、ジョンズ・ホプキンス大学にはこの留学時代に書かれた菊次郎の自筆英文書簡四通が保管されていることがわかった。これらの書簡は旧来の所蔵者 Elizabeth Russell Lindsay から、歴史学者 Hugh Hawkins を通して大学に寄贈されたものである[94]。書簡の宛先は Miss. Nannie（Anne Armour Perkins）が三通（一八八八年七月二十一日付、年不詳九月二十三日付、同九月二十五日付）、その姉妹の Mrs. L. Mackinzie 宛が一通（一八八八年五月十四日付）で、この二人は菊次郎の下宿先 615 St. Paul St. の経営者夫婦によって育てられていた姪たちであった。各書簡からは、菊次郎が下宿先の家族と一緒に旅行するなど深い交流をしており、この姉妹とも親しかったことが読み取れる。特に一八八八年七月二十一日付で旅行先の Luray から 615 St. Paul St. の Anne へ宛てた書簡には、有名な Luray の鍾乳洞を家族たちと訪れたこととともに、以下のような記述のあることが注目される。

I heard that Miss Nannie told some one that she wondered how we sentimental people could get along. Miss Nannie please do not worry about me. I almost forgot what the sentimental is. I am getting shy like country folks, whoever ut-

ters a word “Love” makes me shiver of trouble from fear as though I feel some dreadful things happen. So you see no one dare to utter a word “Love” before me for fear it might kill me. . . I pass my time in a solitary way like a monk in monastery.

Anne との間に特別な感情のやりとりがあったことをうかがわせる。この手紙や残された書簡中には、Anne 側の感情は書かれていないため、二人の関係がどのようなものであったのかは明らかではない。しかし、この点については Anne の姪で書簡の寄贈者である Elizabeth が、一九八四年の Hugh Hawkins への書簡にて Anne からの聞き書きとして以下のように説明している。

Saigo was a very special boarder, like a member of the family, as you will see by these enclosed letters. He was in love with my aunt, the only man she ever wanted to marry, but the racial division made it impossible for her at that time.

Anne も菊次郎を愛しており、彼との結婚を望んでいたが、当時の人種的分断がそれを許さなかったとする。寄贈書簡中には、一八八八年五月に西郷従道の妻清子から Anne の叔母らに宛てて、菊次郎への厚遇を感謝する書簡もあり、そこには西郷家が爵位を有していることや、菊次郎が大臣の甥として将来外交官を約束されていることも記されている。このように日本における西郷家の家格の高さを知りつつも、それでも彼らの結婚は困難であった状況がうかがわれる。なお、Anne はこの後一生を独身で過ごし、その姪にこれらの書簡が伝わることとなった。菊次郎のアメ

リカでの様相を知ることのできる貴重な史料として、ここに紹介しておきたい。

菊次郎の留学自体については、その後順調にはいかなかったようである。明治二十二（一八八九）年十二月六日付で陸奥宗光公使より外務大臣宛に、菊次郎が病気につき、医師の勧めにより帰朝療養の許可を求めている[95]。結局菊次郎は陸奥とともに十二月末にアメリカを発ち、翌二十三年一月二十五日に横浜に到着している[96]。従道邸にしばらく滞在の後[97]、二月十日から赤十字病院に入院し[98]、三月には「病気ニ因リ留学ニ勝ヘ難ク」として、外務省に留学生を免ぜられるように願い出ている。診断書によれば、「右下腿切断頭屡々膿潰シ且ツ痔結節ニ罹リ」という状態であった。外務省はこれを認め、留学中に支給された学資の返納を特別に免除している[99]。このように菊次郎は宿痾のために留学を中止せざるをえなかったことから、この留学については正式な履歴書には記載されなかった可能性がある。

4．台湾赴任の背景と着任初期の実態

(1) 新納家との養子縁組

志半ばでの帰国から半年の後、明治二十三年十月に菊次郎は宮内省式部官に任ぜられ、続いて翌年八月には再び外務省にて、試補そして翻訳官に任命されている。この復職には、陸奥宗光と榎本武揚の関与があったことが推測される[100]。しかしその年の十二月二十一日には菊次郎は翻訳官を依願免職しており、このあと明治二十八年までの彼の履歴書は再び空白期間となっている。この期間の菊次郎については、従来の研究では鹿児島に帰り、療養生活を送って

いたとされてきた[101]。しかしその実態は、大きく異なるものであったことを示したい。

外務省免官の翌月、明治二十五年一月十八日には、西郷従道が西郷菊次郎・西郷隆準を伴って、鹿児島へと出発したことが報じられている[102]。これは前年十二月二十五日、樺山資紀の「蛮勇演説」などを契機として衆議院が解散され、二月に第二回衆議院議員総選挙が予定されたことによるものである。いわゆる吏党側を代表する位置付けにあった従道は、遊猟の名目で二十九日まで鹿児島から熊本を廻り、加治木など各地で演説会・親睦会を行っている[103]。一行のなかには、鹿児島の柏田盛文らとともに菊次郎と隆準の名がみえる。

この時期の菊次郎が吏党の支援活動を行っていたことは、以下の事実からも裏付けられる。選挙後の四月一日、東京神田の開花楼にて「温和派」と称する吏党側関係者の懇親会が開かれたが、その参加者のうちに西郷菊次郎の名がみえる[104]。この集会には、石川の国民派、佐賀の同成会、福岡の玄洋社、鹿児島の独立派、奥羽同志会などの九団体が参加し、その出席者二十余名のなかには、頭山満・白井遠平・西郷菊次郎・藪広光・大島信らがあげられている[105]。玄洋社の頭山満の名があることは注目されるが、後の大正十三年頃には、菊次郎の長男隆吉が東京の頭山満宅に預けられていたとの所伝もあり[106]、この当時すでに二人の間に接点があったことに注意しておきたい。

続く六月には、西郷従道を会頭、品川弥二郎を副会頭として国民協会が設立されたが、菊次郎は品川の鹿児島遊説にも随行していたことが知られる[107]。以上のように品川弥二郎・西郷従道らの意をうけて吏党を支援した菊次郎は、民党側から大きな反発を受けており、そのために西郷隆盛像建立の寄付金が減少したと揶揄する新聞記事もみられる[108]。

翌明治二十六年五月、鹿児島では樺山資紀の呼びかけによって吏党の団体である「春秋会」が結成され、その主要

メンバーとして西郷菊次郎と椎原国幹の名がみえている[109]。続く六月の鹿児島県第六区衆議院議員補欠選挙でも、菊次郎は吏党の候補者を支援している[110]。

ここで筆者が注目したいのは、明治二十七年三月に実施された第三回衆議院議員総選挙と菊次郎の関わりである。二月半ばの新聞各社は、菊次郎について以下のような注目すべき記事を掲載している。

「（鹿児島の吏党側候補として）五区は西郷菊次郎ならんが無資格の為め他の養子とならん」（「東京朝日新聞」二月十一日）

「非民党候補者西郷菊次郎氏ハ予報の如く愈々新納某の養子となり第五区より打て出づ」（「東京朝日新聞」二月十六日）

「鹿児島県第五区候補者ハ河島惇氏独舞台の有様なりしが、今度西郷菊次郎氏新納菊次郎と改姓して突然打て出て、其運動頗る機敏なれバ流石ハ大西郷の子息なりとて撰挙区民も大に同氏に帰し、河島氏ハ頗る苦戦の実況なれども（中略）両氏の勢力伯仲の間に在りて勝敗未だ孰れとも判然せざるよし」（「読売新聞」二月二十日）

この報道が事実であるならば、菊次郎は選挙のために、西郷家の籍を離れて新納家に養子に入ったことになる。これまでの菊次郎に関する先行研究では、このような所伝には全く触れられていない。しかし「読売新聞」では明治二十八年三月段階でも「第一子菊二郎氏は翁の大島流寓中妾腹に生れ、今新納家を継ぐ、寅太郎氏は本妻岩山氏の第一子にして、家を継ぐ」としており[111]、当時広く流布した所伝であったことは間違いない。注目すべきは、鹿児島で大

正七年に刊行された『鹿児島県政党史』である。ここにも「第五区は河島惇（民）対新納菊次郎（吏）、此の新納は、前にも記した如く、西郷南洲の庶子であって、選挙の為めに一時改称したのである」との記述がある[112]。『鹿児島県政党史』は地元鹿児島の薩藩史料調査会の編になり、その刊行時、菊次郎をはじめ存命中の関係者もいたことから、この所伝を単なる誤報と捨象することはできない。

その検証には菊次郎の戸籍を確認する必要がある。台湾総督府文書中には、明治三十六年三月に菊次郎の提出した西郷家の戸籍謄本が収録されている[113]。これによれば、「戸主」寅太郎の「庶兄」である菊次郎の欄は、朱線でいったん抹消され、「明治二十七年二月十六日鹿児島縣北伊佐郡大口村里士族新納喜兵衛養嗣子トナル」と朱筆されている。さらに後欄にて、明治二十八年六月二十日にそれを解消し復籍したとの記載がある。明治二十六年一月に結婚した妻ヒサも、同様となっている。この戸籍から、菊次郎の新納家との養子縁組は事実であったことが判明する。

菊次郎が養子に入った新納喜兵衛については不詳であるが、第五区に含まれる大口村に関わる新納家としては、かつて大口村に所領のあった新納久脩家が想起される。久脩は薩摩藩家老の息子に生まれ、幕末には藩の留学生を引率してイギリスに赴いている。維新後は新政府に出仕し、明治十八年には奄美大島島司もつとめた。久脩は明治二十二年に死去しており、明治二十七年当時は久脩の息子、陸軍大学校教授の竹之助の代である[114]。菊次郎の養子縁組について報じた同年二月二十四日付の The Japan Weekly Mail 紙においても、“The family of Niino is very illustrious, having always occupied the first place among the hereditary retainers of Shimazu, and it still enjoys high prestige in the district.” とあり、この新納家の一族ならば、西郷家に匹敵する家老の家柄として、菊次郎夫妻の養子入りもありえたと推測される[115]。

なお、三月一日に行われた第三回衆議院議員総選挙で、鹿児島第五区の結果は、河島惇（立憲革新党）七二七票、新納菊次郎（国民協会）五〇三票で、民党の河島の勝利であった[116]。この半年後、九月一日に続いて実施された第四回衆議院議員総選挙においても、鹿児島第五区は両者の対決となったが、結果は河島七六三票、新納四三三票であった。このような結果は、菊次郎と新納家の養子縁組の解消に影響した可能性が高い。

以上のように、菊次郎の明治二十四年以降の三年間は、叔父従道や樺山資紀など薩閥関係者の政治的動向に翻弄され、苦難の続いた時期であったことがわかる。このことは同時に、彼の庶子としての微妙な立場をもうかがわせるものである。菊次郎の台湾赴任の背景には、このような事情があったことを考慮する必要があろう。

(2) 台湾での伝染病対策と上水道の敷設

明治二十八年四月十二日、菊次郎は陸軍省雇員を命じられ、台湾へ赴く。日清戦争終結に伴い日本に割譲された台湾では、残留清兵や現地の勢力が強い抵抗を見せており、未だ戦闘状況にあった。このため、日本政府は軍隊による鎮圧と、統治を担う行政官の派遣を同時に進めることとなった。菊次郎の陸軍省雇員の身分は、五月には台湾総督府参事官心得へと切り替えられている。

台湾総督府の初代総督は樺山資紀であり、その赴任当初の武官・文官には薩摩の関係者が多かったことが知られる。台湾の武力平定に派遣された近衛第三連隊のうちに、第二中隊長として西郷寅太郎がいたことは従来から指摘されているが[117]、本稿ではさらに、西郷隆準も同時期に台湾の行政官に任命されていたことに注目したい。西郷隆準は当時式部官であり、二十八年四月に遼寧省営口への移動命令を受けたが、それが「ナンペウ」へと変更され[118]、さら

に五月二十日には菊次郎と同じく台湾総督府の参事官心得に任じられている[119]。その後明治二十九年十月にはすでに式部官に戻っていることから、台湾での勤務は短期間であったとみられる[120]。しかし台湾の割譲当初の時期に、菊次郎・寅太郎・隆準がそろって台湾に赴任していたことは、西郷従道の「征台の役」での活躍と重なるイメージを喚起するようで興味深い。

菊次郎の台湾総督府での役職と事績については、明治三十年五月以降の宜蘭庁長時代の活躍が著名であるが、本稿では従来の研究ではほとんど触れられることのなかった宜蘭以前の時代、特に明治二十八年七月の安平出張所長から明治三十年五月の基隆支庁長までの事績について明らかにしたい。この時期の菊次郎の活動には、後の京都時代にもつながる重要な意味を見出せるからである。

台南地方が平定されたのは明治二十八年十月に入ってからであり、安平出張所が開庁したのは十一月一日のことであった。この出張所は当初から台南民政支部の暫定的機関として設置されたものであり、菊次郎はその十二月末の廃庁まで所長をつとめた[121]。この間、安平市街の清掃・衛生保持を徹底させるとともに、安平港の浚渫工事の実現にも尽力していることを確認できる[122]。翌年二月二十二日には、「横山資英外事課長不在中事務代理」と「大久保利武淡水支庁長不在中事務代理」を命じられている[123]。この二ヶ月後、四月二十四日には台北県基隆支庁長に任ぜられ、翌年五月に宜蘭庁長となるまでの一年余を過ごしている。

この彼の当初の任地、安平・淡水・基隆については、いずれも一八六〇年の北京条約による開港場であり[124]、イギリス・ドイツ・フランスなどの外国人居留地が形成されていたことに注目したい。これらの居留地では衛生問題、すなわち市街地の数少ない井戸を水源とするために、伝染病の不安と飲用水不足が大きな問題となっていた[125]。このよ

うな事情により、特に淡水と基隆には台湾で最も早く近代水道が相次いで導入されたのであるが、菊次郎はそのいずれの計画にも携わっていたのである。

淡水水道は、明治二十八年七月より大久保利武淡水支庁長の下で計画が始まったが、それが具体的に動き出したのは明治二十九年二月の専門技師の着任以降であり、特に三月二十一日には西郷菊次郎淡水支庁長代理より、「技師から二種類の設計案の提出があり、工費節約のために簡易な第二号案をもとに工事に着手したい」旨の稟議が出されている。この計画が認められ、八月より工事開始となっている[126]。

また基隆水道は、淡水の二倍以上、約三万人を給水予定人口として設計された大規模な計画であり、明治二十九年九月、内務省衛生局のお雇い外国人であったバルトンに調査が命じられた[127]。翌年四月、河水を直接送水する第一工事と、濾過池・沈澄池・浄水池を設置する第二工事からなる設計案が提出されたが、予算不足から第一工事のみ実施することとなり、明治三十一年に着工した。三十二年以降、第二工事を継続し、明治三十五年に竣工している[128]。菊次郎の基隆支庁長在任は明治二十九年四月二十四日から翌年五月二十六日であり、淡水の場合と同様に、水道の設計・立案と予算取得のプロセスに、彼が直接関わっていたことが判明する。なおこの時期、淡水・基隆の両支庁の上にあった台北県の知事は、菊次郎とは旧知の橋口文蔵であった。

さらに、この明治二十九年には、日本統治下の台湾で初めてのペストが発生したことにも注意が必要である。香港・広東での流行をうけて、四月にまず安平でペスト患者が発生し、十月には台北にて日本人初のペスト患者が確認された[129]。これを受けて台北県下では、基隆・淡水・新竹の三支庁内に臨時検疫本部を置き、船舶検疫を徹底するなどの対策を取ったが、菊次郎も六月より「伝染病臨時予防支部長」に任じられている[130]。台湾はすでに征台の役の時代

から、マラリアやコレラの蔓延する「瘴癘の地」として恐れられてきたが、この年日本が初めて経験したペストの脅威は、井戸水汚染の恐怖と近代水道の敷設要求にさらに拍車をかけたものと推測される。

一般に、台湾での衛生政策は後藤新平が着任した明治三十一年以降に後に本格化したとされている。しかし、居留地を中心とする都市部では、このようにそれ以前から積極的な施策が進められていたことに注意したい。菊次郎はこれらの事業に最前線で携わっていたことになる。以上のように、彼は台湾赴任の初期、淡水・基隆支庁長在任時においても、居留地での伝染病と近代水道の設置という、横浜と共通した体験に直面していたことがわかる。

(3) 拓殖務次官・北垣国道との接点

さらに、菊次郎の淡水支庁長代理時代に関して、彼が外事課長代理を兼任していたことに注目したい。彼の前任の大久保利武も一時両職を兼任しており、淡水にはイギリスはじめ各国の領事館が存在したことによるものと思われる。外事課とは、日本の領台に伴って生じる各国との利害調整、すなわち樟脳・阿片などの通商や居留地の問題について、交渉の最前線に立った部局である。ただしこの外事課の抱える案件は、直接外務省へ上げられるのではなく、いったん拓殖務省を経ねばならなかったことに注意したい。その後拓殖務大臣から外務大臣へと伝達されることになっており、領台の当初にはこのような二重体制が存在していた(131)。その煩雑さのために拓殖務省は明治三十年九月には廃止されるのであるが、菊次郎の外事課長代理在任時は、まだこの二重体制の下にあった。

重要なことは、この外事課からの報告を受ける拓殖務省の次官が、北垣国道だったことである。彼は明治二十九年四月三日より三十年七月十五日まで大臣高島鞍之助の下で拓殖務省次官として実務を総括しており、台湾総督府と緊

密なやりとりをしていた。その時期が、菊次郎の外事課長代理時代とも重なっていることに注目したい。例えば、明治二十六年六月二日に起草された在淡水英国領事館の敷地移転に関する案件では、北垣次官宛ての総督府民政局長からの報告書のなかに、菊次郎が英国領事らとともに現地に向かい、その交渉に当たったことが記されている[132]。つまり北垣と菊次郎はこの時期、職務上のつながりがあり、北垣は菊次郎の仕事ぶりを直接知ることのできる立場にあったのである。

この明治二十九・三十年頃の台湾総督府では、官吏の不正や横領が相次いでおり、綱紀粛正を目指した乃木希典総督でさえもその任を果たせず、辞任に至るような状況にあった[133]。このような中で、本土に聞こえてくる菊次郎の評判は以下のようなものであった。

「台湾総督府文官中二派ありて互ひに軋轢する中に、其渦中に没せず超然局外の地位にありて専ら政務に鞅掌する一派あり。西郷菊次郎氏の一派是なり。此一派ハ互に相戒め最も廉潔を重んじ、最も正直を旨として他の朋党に與せず、一意孜々台湾の進歩発達を計画期図し居るも、其人員ハ僅々十数人に過ぎず、其他ハ殆ど朋党渦中に没し狂奔し居ると云ふ」（「東京朝日新聞」明治三十年五月二十八日）

この記事は、彼の有名な宜蘭庁長時代よりも前のものであることに注意したい。北垣は、三十年七月の拓殖務省退官後も台湾に赴任した元部下などから現地の情報を得ており[134]、この後宜蘭時代に続く菊次郎の評価についても、耳にしていた可能性が高い。

一方、この頃の京都では、明治二十八年の内国勧業博覧会・平安遷都紀念祭開催を契機として衛生問題が重視され[135]、同年にはバルトンを招聘して下水道の調査を委託するなど[136]、都市の近代化と衛生環境、特に伝染病予防と上下水道の整備に関心が集まっていた。しかしながら明治三十年代に入り、初代の勅裁市長、内貴甚三郎の時代に至っても、その着工の目処さえ立たない状況であった。元京都府知事としてこれを憂いていた北垣にとって、台湾の居留地での関係事案を処理し、その上水道設置を迅速に実現させた菊次郎の手腕は、印象に残るものだったのではないだろうか。

ここにおいて、北垣が菊次郎を京都市長に擁立した背景の一端が見えてくる。北垣は「（西郷菊次郎市長を）推薦したるは余にて、故児玉男が保証人たり」と述べている[137]。さらに児玉から話を受けた桂太郎首相が、菊次郎を京都市長に推薦することを大森鍾一京都府知事に依頼したとされる[138]。桂太郎と児玉源太郎は、いずれも台湾総督府の初期の総督（第二代と第四代）であり、菊次郎を直接知る人物である。

さらに本稿では、秋元せき氏によって見出された桂の大森宛書状に注目したい[139]。

（前略）故大西郷之一子にして、二十八年来台湾に奉職いたし先般罷職帰京いたし居候、西郷菊次郎を採用に相成申間敷哉、当人ハ老生曽而台湾に惣督たりしときも親シク本人之性質ハ勿論、其手並も篤と承知いたし居候者ニ而、市長之如きハ尤モ適当之職と相考申候（後略）

桂は菊次郎の台湾での行政手腕を高く評価しているが、「老生曽而台湾に惣督たりしときも親シク」交際していた

背景として、両者の間に横浜のファブルブラントの存在があった可能性を指摘しておきたい。桂や井上馨・伊藤博文らの長州閥も幕末以来ファブルブラントから武器を購入し、交流を持っていたが、特に桂は明治初頭のスイス滞在の際にはファブルブラントの母親宅に宿泊した間柄であった[140]。ファブルブラントの誼を通して、菊次郎と桂の親交が深まった可能性のあることを憶測しておきたい[141]。

以上のように、台湾総督府の赴任初期の活動と人脈が、菊次郎の京都市長就任へと大きく作用したことが推測されるのであるが、京都時代の菊次郎にとっても、この台湾で培った人脈が重要な役割を果たしていたことがうかがえる。西郷市長の右腕として明治三十八年二月から高級助役に就任した川村鉚次郎は、中立銀行副支配人兼台湾出張所長を経て百三十銀行若松支店長であったとされるが[142]、台湾総督府文書によれば、明治二十八年十月には総督府の民政局経理課事務嘱託として勤務しており、さらに翌年七月には基隆支庁兼務となっている[143]。彼もやはり、台湾総督府時代初期の知己だったことがわかる。川村は、助役だけでなく第二琵琶湖疏水と上水道工事を統轄する臨時事業部の部長を兼任し、菊次郎を直接支えた人物である[144]。その二人の関係性が、基隆時代に培われたものであったことは重視されよう。

5. 西郷菊次郎と京都邸

以上のような菊次郎の経歴をたどれば、この時代の京都に他ならぬ彼が市長として求められた理由がみえてくるように思われる。京都市内においても、一八九〇年代の十年間で腸チフス・コレラ・赤痢等の患者数は一万人を超えて

おり、下水からの浸透を防げない井戸水の汚染は、すでに相当深刻な状態にあった[145]。伝染病予防と上下水道整備は、京都が近代都市へと脱皮するのに不可欠な施策だったのである。このような状況下で、明治三十九年に彼自身が民間の雑誌に向けて語った言葉がある[146]。

> 山紫水明の地を呼ぶに衛生上危険の地なりと云ふが如きは、頗る解すべからざるに似たりと雖も、ペストの如き悪疫こそ未だ侵入せざれ、腸窒扶斯、赤痢の如きに至りては其発生実に頻々たり、（中略）水道の無きは京都市の一大欠点なり。前述の如く京都の水は決して良水にあらざるに、未だに他より良水を供給するの法を講ずるに至らざりしは市の不面目の極みとや云はん。（中略）水道の設備は単に利便衛生の上より其必要を認むべきに止まらずして、都市としての面目上亦必ずや之れが設備なかるべからず。

この言葉は、横浜や台湾の居留地で都市衛生と上水道敷設に関わった彼の経験を彷彿させるものであろう。菊次郎はこのような強い意志をもって第二疏水と上水道の建設に臨んでいたのである。しかしその困難な事業が七年目を迎えた頃、ついに菊次郎は喀血する。彼は右脚の宿痾に加えて、台湾在任中にはマラリアにも罹患していたのであるが[147]、さらに結核を発症したのである。これを理由として明治四十四年五月、彼は二期目の任期を五年以上残して市長を辞任することとなった。

以上のように困難な時代を過ごした彼の京都邸の位置については、当時の官員録等には「聖護院町」[148]とあるのみで、具体的な字名や番地を欠いている。しかし、これまでの伝記には「聖護院を官舎として借りた」とあり[149]、また

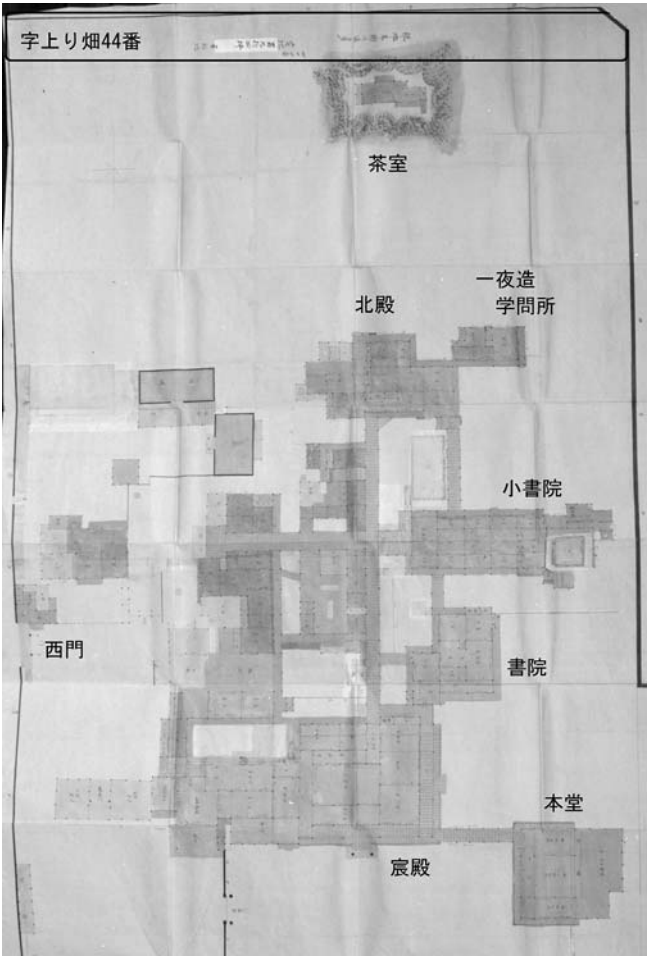
『京都市政史』所収の「大野盛郁日記」にも「聖護院内ノ西郷氏邸」に行くとあることから[150]、聖護院門跡の敷地内に存在した可能性はもともと推測されるところである。今回、筆者はその番地が記載された史料を見出したので、以下に分析してみたい。

国立公文書館所蔵、明治四十三年十月の京都市長再任時の履歴書には、この時点での彼の居住地として、「京都市上京区聖護院町上り畑四拾四番地」と記載されている[151]。さらに明治四十四年四月に刊行された『人事興信録』にも、西郷菊次郎の住所として「京都、上京、聖護院上り畑四四」という同じ番地が掲載されている[152]。この住所表記を、地番変更後の現在の番地表記と対応させると、「聖護院中町一三」に相当する[153]。この地筆は聖護院門跡の敷地の北端部分にあたる（第1図）[154]。

この地筆の付近には築山とその上の茶室しかみられないため[155]、菊次郎が住まいとした建物との関係については、さらに考察が必要である。この菊次郎邸の建物に関しては最近、聖護院の西門入って北側にかつて存在した「民家」であったとする説が出されている[156]。しかし、その建物の住所表記は公文書では「上京、聖護院、御殿西門内」あるいは「上京、聖護院、西門内」となっており[157]、前述のように菊次郎の住所が「聖護院町上り畑四四」と表記されることとは矛盾している。

この疑問を解く手がかりとして、菊次郎の退去から二年後の大正二年に、同じく聖護院境内の借家に入居した京都帝大教授・朝永三十郎の事例をみておきたい。朝永三十郎はノーベル賞学者の朝永振一郎の父であり、その後十一年間にわたる一家の聖護院境内での暮らしぶりは、息子達の回想録に詳しく描かれているからである。

（わたしたち一家は）通称聖護院御殿という寺の境内の借家に移った。兄が小学校一年生の時であった。はじめの家は寺の西門をはいった左手の、間数が七つほどの平家建ての家であったが、三、四年ここにいてから父とひどくうまが合った院主さんのすすめで寺の建物と廊下つづきの間数が二十ほどもある広い家にかわったのであ



第１図　明治前期の聖護院門跡境内と建築物の間取り（京都府京都学・歴彩館　京の記憶アーカイブ「聖護院蔵　聖護院境内図」部分・一部加筆）

る。（中略）大正十二年（一九二三）の秋に、聖護院の院主さんが急逝されたため、私達一家は境内の借家から出なければならなくなった[159]。（傍線は筆者）

この文章から、聖護院門跡の境内には「借家」となっていた建物が二ヶ所あったことがわかる。「はじめの家」が前述の西門北側の建物を指すことは明らかであるが、それでは二軒目の「寺の建物と廊下つづきの広い家」とは、どの建物を指すのであろうか。これについては、朝永振一郎自身の言葉がある。

子どものころは、聖護院の境内に、おそれ多くも光格天皇の一夜御殿というゆいしょある大きな建物を借りて住んでいて、そこの若いお坊さんによく遊んでもらった。（中略）その家も今では旅館になっている[160]。

二軒目の「広い家」とは、光格天皇の一夜造学問所とそれに連なる御殿部分、すなわち「北殿」と呼ばれる一角であったことが明らかである[161]（前掲第1図）。聖護院門跡の建築自体も、一部が借家として提供されていたことに注目したい。この北殿には、朝永家の入居前には賀陽宮家が明治四十五年から大正二年まで仮住まいしていたことが確かめられる[162]。この二つの「借家」には、建物面積や設えの点で大きな格差があり、朝永家はあくまでも院主の特別な好意で家移りしたことに注意が必要である。これら二つの建物のうち、菊次郎の市長公邸として借り上げられたのはいずれであったのだろうか。

その答えは、聖護院文書の中に存在する[163]。今回の調査で、明治四十一年三月の聖護院会計課の収入簿に、「三十

一日　四拾円　西郷市長北殿借料」とあることを見いだした[163]。他の月にも「西郷北殿借料」「西郷菊次郎宿料」などとあり、菊次郎邸が北殿を借り上げたものであったことは確実である。西郷家は毎月四十円の家賃を明治四十四年五月まで支払っており、それが最初に確認されるのは、明治三十九年十月である[164]。六日分の日割額を差し引いた三十二円二十六銭となっており、よって菊次郎の北殿での居住は、この三十九年十月七日より始まったことが判明する。

なお、この時期の収入簿には、「西郷氏家賃」の四十円とともに、「渡邊庸家賃」の十五円が併記されていることに注意したい。これは第三高等学校教授の渡邊庸であり、明治三十七年および四十四年の住所録にも「聖護院門跡構内」と記されている[165]。彼の家賃の支払いは、明治四十五年八月で終わっており、よって渡邊が朝永家の前の西門北側建物の借家人であったと推定される[166]。

菊次郎の着任時には、年俸三〇〇〇円と年間一〇〇〇円の交際費、さらに舎宅料として年六〇〇円が予定されていた[167]。明治三十七年段階におけるこの舎宅料の金額は、相当な規模の邸宅が想定されていたことを示している。菊次郎は宜蘭庁長時代にも、あらゆる来客に対応するために庁長公邸の品格にこだわっていたことを想起したい[168]。北殿はこの要求に応えうる「御殿」だったのである[169]。この北殿の建築が、今日なお「聖護院御殿荘」の一部として現存していることは重要であろう。菊次郎の台湾時代の旧邸である宜蘭設治記念館と並んで、京都にも彼の市長公邸だった建物が残されていることの意義は大きい。なお、菊次郎の家族写真のうちに、この北殿の前で撮影されたとみられるものがあることも注目される[170]。

北殿は、聖護院門跡の建築群のうち最も北に位置する殿舎であり（前掲第1図）、前掲の北端部の地筆にも一番近

い建物である[171]。天明期の仮皇居としての作事では、北殿から築山・茶室までは垣根で囲まれており、学問所と一体となった「御庭」が構成されていた[172]。大正期の朝永家でも、建物だけでなくその北側に広がる庭園部分を自由に使用しており、庭の一隅には自家の菜園もつくられていた[173]。「上り畑四拾四番地」という住所表記は、このような北殿を中心とする生活実態のもとで理解されるべきであろう[174]。

さて、この菊次郎の京都邸を訪問した人物は、助役の大野盛郁以外にも存在する。当時、同志社大学第七代社長（総長）であった原田助である。彼の明治四十一年六月十六日の日記には、以下の記述がある。

> 京都市長西郷菊次郎氏に晩餐に招かる。座談興味津々として尽きず。同氏は南洲翁が大島流滴中に生れたる由なるが、秘蔵の南洲翁の「私学校ニ示ス心得書」等を見せらる。（後日西郷市長に旧三十番の写真を贈る。曽て南洲翁が下宿したりと伝えらるる旧屋は多分同家屋なりしならんとの説あればなり）[175]。

当時、菊次郎の長男隆吉は同志社普通学校に在学中であったが[176]、原田との交流はそれだけを理由とするものではないだろう。原田は熊本洋学校の出身であり、同校出身の家永豊吉・下村孝太郎とつながりがあった。下村孝太郎は原田の前の同志社社長（一九〇四～一九〇六年）であり、彼が北垣国道の娘婿であったことは前述した通りである[177]。北垣が新島襄の同志社設立を深く支援していたことも広く知られている[178]。北垣によって京都に呼ばれた菊次郎にとっては、ジョンズ・ホプキンス大学での同志社関係者との交流と合わせて、当時の同志社は親しい存在であった可能性が高い。外務省時代に菊次郎の後見にあたった陸奥宗光も、同じく新島と同志社の支援者であったことも示

唆的である[179]。

原田助はイエール大学への留学経験があり、新渡戸稲造とも親しく交流を持っていた。後に彼の息子の原田健は、新渡戸の秘書となっている。この夜の菊次郎との「座談」も、同じ頃に京都帝大教授として京に赴任していた新渡戸の話に及んだかもしれない。原田は菊次郎が会長をつとめる東洋平和協会の役員にもなっており[180]、二人の親交は長く続いたと推測される。

なお、原田が菊次郎に贈った「旧三十番の写真」とは、同志社英学校の開校当初に聖書講義の行われた特別教室、「三十番教室」の写真を指している。校内での聖書の授業を禁じられた新島が、校地から道路一本を隔てた地点に私宅として購入した家屋である。同志社の校地は旧薩摩藩邸であり、それに近接するこの家屋には、かつて西郷隆盛が起臥したとの伝説があった[181]。たしかに西郷隆盛の京都での居宅は相国寺近辺にあったとされるが、ただし現在の研究ではその位置は相国寺門前のさらに東側、「塔ノ段」であったと考証されている[182]。したがって「三十番教室」説は伝承の一つにすぎないが、西郷家が親子二代ともに一時期京都で邸宅を持ったという事実が、その夜の二人の間で話題になったものと思われる。

6. おわりに

本稿では、西郷菊次郎の前半生において空白となっている期間の実態を解明することを試みた。特にこれまで知られていなかった海外所蔵資料の分析により、ジョンズ・ホプキンス大学での留学と恋愛、新納家との養子縁組、台湾

淡水・基隆での水道敷設など、未解明であった彼の来歴の一部をうかがうことができた。横浜と台湾の外国人居留地における伝染病流行と近代水道導入という経験は、後の京都での都市衛生政策にも大きな影響を与えたと推測される。さらに本稿では、菊次郎の京都邸の一つが聖護院門跡の「北殿」であったことを明らかにし、その建築が現存していることを示した。

本稿では菊次郎に関する史料の発掘と基礎的な分析にとどまり、例えば頭山満との関係や、さらに当時の植民地政策への考え方など、彼の思想面については論じることができなかった。これらに関しては今後の課題としたい。

西郷菊次郎に関する史料は、本稿で取り上げたもの以外にも、子孫宅に多く伝わっていることが知られている。昨年度、関係史料の多くが拓殖大学に寄贈され、今年に入って一部が各地の博物館で展示されたとの報道があった。これら史料の全容が早期に一般公開され、菊次郎に関する研究がさらに進展することを期待したい（二〇一八年十月九日入稿）。

〔付記〕

ジョンズ・ホプキンス大学には貴重な史料をご提供いただき、また台湾総督府文書の閲覧にあたっては、城地学先生に有益なご教示をいただいた。聖護院門跡様からは研究の遂行に多大なるご配慮を賜った。記して厚く御礼申し上げたい。本稿の第5章、西郷菊次郎の京都邸の住所考証部分については、二〇一八年六月十二・二十日に龍郷町教育委員会に情報提供した内部資料を元にしている。ただし龍郷町の不注意により、情報提供者の個人情報等が流出したことや、本稿での公表が済むまでは内部資料にとどめるとした提供時の約定が守られなかったことは、問題である。

注

(1) ①秋元せき「京都市長の選考過程についての一考察―西郷菊次郎市長選出の背景」京都市政史編さん通信7、二〇〇一、一―七頁。②並松信久「明治末期京都の都市経営：西郷菊次郎の事績を通して」京都産業大学日本文化研究所紀要　一七、二〇一二、四六八―五一七頁。③伊藤之雄「カリスマ市長と三大事業計画」（同『「大京都」の誕生　都市改造と公共性の時代一八九五～一九三一年』ミネルヴァ書房、二〇一八）二八―六一頁。

(2) 山田尚二「西郷菊次郎の履歴等」敬天愛人　一四、一九九六、二〇七―二一六頁によれば、築地健吉氏写本、県立図書館蔵とある。

(3) 村野守治「西郷菊次郎関係文書について」鹿児島女子短期大学紀要　一三、一九七八、一―一六頁。

(4) ①築地健吉「西郷菊次郎小伝」大隅　八、一九六二、五八―六〇頁。②西岡良博『行雲流水―第二代京都市長西郷菊次郎の生涯』文芸書房、一九九八。③佐野幸夫『西郷菊次郎と台湾―父西郷隆盛の「敬天愛人」を活かした生涯』南日本新聞開発センター、二〇〇二。

(5) 前掲(4)③。原口泉氏はこの著作について、「菊次郎に関する研究で最も信頼できる」と評価している（原口泉『西郷家の人々』角川学芸出版、二〇一七）。

(6) この時期については正式な履歴書には未載のため、主に前掲(4)③に基づいて記述する。

(7) 以下、前掲(2)による。

(8) 国立公文書館、請求番号：任B00587100、「京都府京都市長後任後補者中西郷菊次郎市長就任ノ件」、任免裁可書・明治四十三年・任免巻二七。

(9) 前掲(3)。

(10) 前掲(2)。

(11) 京都市市政史編さん委員会編『京都市政史　第1巻』京都市、二〇〇九、一八六―二一五頁。

(12) 前掲(1)③。

(13) 以下、北垣国道の官歴については、国立公文書館、請求番号：叙00481100、「枢密顧問男爵北垣国道特旨叙位ノ件」、叙位裁可書・大正五年・叙位巻二による。

(14) 田中彰「札幌農学校と米欧文化」（北海道大学編『北大百年史　通説』ぎょうせい、一九八二）四八九―五〇五頁。
(15) 国立公文書館、請求番号：公00698100、「黒田次官出張中諸伺権判官北垣国道外一人代理届」、公文録・明治五年・第七十四巻・壬申一月～五月、開拓史伺元。
(16) 塵海研究会編『北垣国道日記「塵海」』思文閣出版、二〇一〇、三〇五頁に、「慶応乙丑ノ頃国道ハ翁ト交リ、其薫染ヲ受ケタルニ付」とある。
(17) 西岡淑雄「明治五年二月十八日横浜発のアメリカ号で渡航した留学生たち」英学史研究　二六、一九九三、一五九―一七二頁。
(18) 前掲(4)③。
(19) 牧野伸顕『回顧録Ⅰ』文芸春秋新社、一九四八、七五頁。
(20) 前掲(19)三九頁。また日本史籍協會編『大久保利通文書四』一九二八の文書番号686・688・690として、大久保が両人へ息子二人の世話を依頼する書簡がみられる。
(21) 高橋新吉「南洲翁の苦衷」日本及日本人、明治四十三年九月号、一九一〇、八九頁。
(22) 前掲(21)。
(23) 松浦玲『勝海舟』筑摩書房、二〇一〇、五二三―五九五頁。
(24) 本稿では、鷺只雄「吉井勇論（4）第一章　家系　その四」都留文科大学大学院紀要　四、二〇〇〇、一七―三九頁での翻刻によった。
(25) 横山詠太郎『中井桜洲』革新時報社出版部、一九二六。
(26) 織田直文・玉置伸悟「第一琵琶湖疏水開発における立案要因（第一琵琶湖疏水開発成立過程に関する研究・その1）」日本建築学会計画系論文報告集　四二六、一九九一、一〇一―一一〇頁。
(27) 前掲(11)、一二六―一三三頁。
(28) 前掲(1)③。
(29) 本稿では、齋藤伸郎「明治十四年　樺山資紀日記」国士舘史学　二二、二〇一八、一〇九―一七二頁によった。
(20) 菊次郎は典拠不明ではあるものの、「一時印刷局に勤めたことがある」とも指摘されており（前掲(17)、この事件に関わるも

のかもしれない。

(31) 国立公文書館、請求番号：任00253100、「逓信省・逓信省会計局長従六位高橋良教特旨ヲ以テ陞叙ノ件」、官吏進退・明治二十四年・官吏進退十二・叙位五・司法省・農商務省・逓信省。

(32) 国立公文書館、請求番号：公02503100、「鹿児島県士族高橋良教米国人ト結婚ノ件」、公文録・明治十二年・第七十九巻・明治十二年十一月・内務省三。

(33) 新聞記事中にある「居留地八十三番館仏人某」については、一八八四年段階では八十三番の居住者は、“Cope & Co. Auctioneers and General Brokers”, “Mrs. Hodge. Millinery Store”, “Geo. Hodges. Private Residence”. となっている。Japan Gazette, *The Japan Directory 1884*, Japan Gazette, p 40。

(34) 前掲(3)。

(35) 従道は近代競馬の導入に深く関わっており、日本人の馬主第一号となったのに加えて、明治八年には自身が横浜競馬に出走し、優勝している。

(36) 以下、競馬の開催日程については、当時の読売新聞での会告による。

(37) 従道は「来ル十九日同廿日御外山ニおいて競馬施行ニ付、ファブール君、ショネノ君其外両家之人ニ且両君之朋友等競馬御遊覧相成候ハハ、拙宅において午餐可差進含御座候」として、その連絡を菊次郎に頼んでいるが、「御外山」の競馬とは、明治天皇も行幸した戸山競馬のことである。戸山競馬の開催は明治十七年の春期までに限られるが、十一月十九・二十日の開催日程は明治十四年のものである。なお、この日程は雨で延引となり、一週間後の二十七日に開催されていることから、番号22「廿七日競馬ニサラヘル氏父子」も招待するとの書簡も、同年のものと判断される。

(38) 横浜外人墓地のファブルブラント家の墓碑による。

(39) Japan Gazette, *The Japan Directory 1884*, Japan Gazette, p 61.

(40) 山樵亭主人『新月　山田寅次郎』岩崎輝彦版、一九五二年、二頁。

(41) 出口智之「山田寅次郎と幸田露伴―若き日の交遊」（山田寅次郎研究会編『山田寅次郎宗有』宮帯出版社、二〇一六）一三五―一九一頁、なおサラベルの語学学校の存在についてはさらに遡り、明治八年頃には三菱の岩崎久弥らもここで寄宿生として過ごしていることを確認できる（岩崎家傳記刊行会編『岩崎久弥傳　岩崎家傳記五』一九六一年、一七三頁）。

(42) 以下、平野光雄「ゼエームス・フアブルブランド伝」（同『明治前期東京時計産業の功労者たち』「明治前期東京時計産業の功労者たち」刊行会、一九五七）二一〇―二三五頁による。

(43) なおファブルブラントは、スイスのフランス語圏の出身であった（桑原千代子『わがマンロー伝―ある英人医師・アイヌ研究家の生涯』新宿書房、一九八三、一四三頁）。

(44) 本書によればファブルブラントは西郷隆盛と刎頸の交わりを結んでいたとされるが、西南戦争の折には政府側に弾薬等を納入していた事実も確認される。JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C 09082782200、砲兵本廠提理大築大佐外とファブルブラント氏の条約　明治 10.4.6~11.5.14（防衛省防衛研究所）。

(45) 後述するジョンズ・ホプキンス大学の Special Collection “Hugh Hawkins papers” 中の ‘5 letters and 2 photographs of Kikujiro Saigo, Japan, undated’ に、一八八七年九月十四日の横浜の消印のあるファブルブラント商会から米国公使館の菊次郎宛ての封筒が含まれている（ただし封書は残されていない）。

(46) *The Japan Gazette, a Fortnightly Summary*, 28(9), 1881.11.8 p 256.

(47) *The Japan Gazette, a Fortnightly Summary*, 26(8), 1880.10.16 p 164. この競技会には大山巌と川村純義も参加していた。

(48) *The Japan Gazette, a Fortnightly Summary*, 28(3), 1881.8.11 p 82.

(49) W. T. Buckle, “The Water Supply of Yokohama”, *The Japan Gazette, a Fortnightly Summary*, 27(5), 1881.9.9. pp 123-125.

(50) 笠原英彦「近代日本における『衛生工事』の進展―横浜水道の事例から」法學研究（法律・政治・社会）七六巻一二号、二〇〇三、一―二二頁。

(51) 『日本水道史』日本水道協会、一九六七、一九〇頁。

(52) 前掲(23)。

(53) 前掲(23)。

(54) 鷺只雄「吉井勇論（六）　第一章　家系　その六」都留文科大学大学院紀要　一〇、二〇〇六、一―一四頁での翻刻による。

(55) 近衛篤麿「航西紀行」（水谷川忠麿編『蛍雪餘聞　第八』陽明文庫、一九三九）二七〇頁。

(56) 三峯（吉井友実）宛霞山（近衛篤麿）書簡、三月二六日（「山口コレクション」神奈川県立公文書館所蔵）。

(57) 「海舟日記」明治十四年八月四日（勝部真長・松本三之介・大口勇次郎編『勝海舟全集20』勁草書房、一九七三）三七一頁。

西郷菊次郎の来歴に関する再検討

この年海舟は薩摩琵琶曲「城山」を作詞しているが、作曲は西による。

(58) 「海舟日記」明治十八年一月二十三日（勝部真長・松本三之介・大口勇次郎編『勝海舟全集21』勁草書房、一九七三）一〇三頁。

(59) 西郷菊次郎ら連名書簡、明治十八年三月二十六日（勝海舟全集刊行会編『勝海舟全集別巻』講談社、一九九四）二八八頁。

(60) 以後、本稿では、三島義温編『三島弥太郎の手紙』学生社、一九九四による。

(61) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C 14110942100、近衛歩兵第三連隊歴史　第二巻二／一七　明治27.9.1~28.12尽日（防衛省防衛研究所）に、「同年九月十九日歩兵少尉西郷寅太郎独逸国留学被免当連隊付ニ補セラル」とある。

(62) 前掲(60)、四四頁。

(63) 大島直治「辰次郎のことども」（根本善春編『大島辰次郎君追想録』根本善春、一九三九）三〇五―三二八頁。なお、大島辰次郎は仙蔵の次男であり、大島直治は仙蔵の弟である。

(64) 大島直治「兄と弟」（麓啓一郎編『大島直治先生追想録』大島直治先生追想録刊行会、一九七〇）三八一―三八八頁。

(65) 大久保利武「大島辰次郎君を追惜す」（根本善春編『大島辰次郎君追想録』根本善春、一九三九）三五―四〇頁。

(66) 「故工学士大嶋仙蔵君ノ為メ義捐金募集」工學會誌　一四七、一八九四、一四一―一四二頁。

(67) 前掲(63)、三一一頁。

(68) 榧木寛之「大島さんの思ひ出　菅原恒覽氏談話筆記」（根本善春編『大島辰次郎君追想録』根本善春、一九三九）六五頁。吉井社長とは日本鉄道会社社長に就任していた吉井友実と推定される。

(69) 明治十七年に訪米した実業家今井清之助は、ニューヨーク滞在中に「主として米国文化の談話を聴き、為めに鉄道工芸等の質義を試みたるは、常時の領事高橋新吉氏」等であったとし、後年九州鉄道会社の設立に当たって高橋新吉を社長に迎えている（野田正穂・原田勝正・青木栄一編『明治期鉄道史資料　第六巻　鉄道家伝（2）今井清之助君事歴』日本経済評論社、一九八〇）。

(70) 父からそれを聞かされていた仙蔵の息子辰次郎は、後年にフィラデルフィアを訪問し、ウィスター・モリスの墓参りをしている。前掲(68)、七〇頁。

(71) 内田道子「メアリ・H・モリス奨学金」（飯野正子・亀田帛子・高橋裕子編『津田梅子を支えた人びと』有斐閣、二〇〇〇）

一七七―二〇一頁。

(72) 内村鑑三も「我儕日本人として米国費府（フィラデルフィア）に遊ぶ者は独りとしてウィスター、モリス氏の名を知らざる者なく氏の厚遇に与らざる者は殆ど稀なり。（中略）我国の公使領事、学生商人の孰れの職業に関せず費府に到る時はモリス氏の親切を蒙らぬ者は殆ど稀なり」としている（内村鑑三「ウィスター、モリス氏に関する余の回顧」明治二十四年六月二十六日「基督教新聞　四一三号、『内村鑑三全集1』岩波書店、一九八一、一九六―一九八頁に所収）。

(73) U.S. Congress, *Congressional Directory,* U.S. Government Printing Office, 1886, p 159.

(74) 前掲(8)。

(75) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B 16080852100、亜米利加之部　明治二十～二十二年（外務省外交史料館）。

(76) 大櫃敬史「新渡戸稲造の米国留学時代における農学研究に関する実証的研究」北海道大学大学院教育学研究科紀要　一〇一、二〇〇七、五五―六七頁。

(77) Hugh Hawkins, *Pioneer : A History of the Johns Hopkins University, 1874-1889,* Cornell University Press, Ithaca, 1960. pp 169-186.

(78) 前掲(76)。

(79) 太田雅夫編著『家永豊吉と明治憲政史論』新泉社、一九九六、三四―六三頁。

(80) 当時の *Johns Hopkins University Circulars* が大学に所蔵されており、そこには Enumeratin of Classes として全科目の履修生、さらに全学生の名簿が掲載されている。本研究では、このサーキュラーの Vol.7(60)、一八八七年十一月以降の号を調査した結果、Vol.9(76)、一八八九年十一月までのものに西郷菊次郎の記載があることを確認した。

(81) 前掲(79)。後述のジョンズ・ホプキンス大学での大日本帝国憲法発布記念祝賀会時に発行された冊子の分析に基づくものである。

(82) 前掲(79)。

(83) 新島襄全集刊行委員会編『新島襄全集7』、同朋舎出版、一九九六、二三八頁。

(84) 徳富猪一郎『蘇峰自伝』中央公論社、一九三五年、一〇五頁。なお家永と下村は、蘇峰と同じ熊本洋学校の出身であった。

(85) 後述するジョンズ・ホプキンス大学の Special Collection “Hugh Hawkins papers” 中の ‘5 letters and 2 photographs of Kikujiro Saigo, Japan, undated’ に、一八八七年四月十八日の消印の Mrs. Laura Mackenzie & Mrs. Armour 宛ての封筒（封書は散逸）が

あり、その住所は 615 St. Paul St. となっている。

(86) Letters to H. B. Adams 6), Bonn am Rhein, 1987. 11. 22（新渡戸稲造全集編集委員会編『新渡戸稲造全集　第二三巻』教文館、一九八七、四七一頁）。

(87) その当日の内容を記録した冊子が大学から出版されている。*The Constitution of the Empire of Japan : With the Speeches Addressed to Students of Political Science in the Johns Hopkins University*, Publication Agency of the Johns Hopkins University, Baltimore, 1889. 以下の記述はこの記録に基づく。

(88) ただしこの文章自体は、小野英二郎が自分の両親に家永の活躍を伝えた書簡の一節である（小野俊一「留学生内村鑑三―未知のドキュメント若干」中央公論、一九五一年六月号）。

(89) 前掲(79)。太田雅夫「新島襄と家永豊吉」（伊藤彌彦編『新島襄全集を読む』晃洋書房、二〇〇二）一〇六―一二七頁。

(90) 高島鞆之助「王政復古の大業は是からだぞ」日本及日本人、明治四十三年九月号、一九一〇、四三―四八頁。

(91) 家永は明治三十二年から台湾総督府製薬所に勤務し、阿片制度調査関係事務調査に携わっている。これは徳富蘇峰から後藤新平への紹介によるものであった。新渡戸は後藤の招きにより、明治三十四年から台湾総督府技師を経て民政部殖産局長心得・臨時台湾糖務局長となっている（前掲(79)）。

(92) 本井康博「下村孝太郎」（同『徳富蘇峰の師友たち―「神戸バンド」と「熊本バンド」』教文社、二〇一三）二八〇―二八四頁。

(93) 前掲(16)、三二七頁。

(94) ジョンズ・ホプキンス大学図書館 Special Collections の "Hugh Hawkins papers" に、"5 letters and 2 photographs of Kikujiro Saigo, Japan, undated" とのファイルがあることを見出し、今回そのすべての内容について確認した（史料名には 2 photographs とあるが、現状では写真は含まれていない）。5 letters のうち一通は菊次郎ではなく西郷従道の妻清子からの英文書簡（一八八八年五月二十八日）である。なお、封筒のみのものが二通ある（前述のファブルブラントの封筒と注(85)の封筒）。これと別に寄贈者 Elizabeth Russell Lindsay による一九八四年の添え状も含まれている。

(95) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B 16080852200、亜米利加之部／西郷留学生病気ニ付帰朝ノ件　明治二十二年十二月（外務省外交史料館）。

(96)「東京朝日新聞」明治二十三年一月二十六日。
(97)「東京朝日新聞」明治二十三年一月二十九日。「読売新聞」同年二月八日。
(98)「読売新聞」明治二十三年二月二十四日。
(99)前掲(95)。
(100)年不詳であるが、榎本より陸奥宗光宛の書簡に、菊次郎の高等文官試験受験に触れたものがあり、榎本が外相であったこの時期に二人の間で菊次郎の将来をめぐる相談が交わされていた可能性が高い（榎本武揚書状「西郷菊次郎高等文官試験受験」明治年六月二十四日、「陸奥宗光関係文書」国立国会図書館所蔵）。
(101)前掲(4)③。
(102)「東京朝日新聞」明治二十五年一月十九日。「読売新聞」同日。
(103)「東京朝日新聞」明治二十五年二月五日。
(104)「東京朝日新聞」明治二十五年四月二日。
(105)東京経済雑誌　二五巻六一八号、一九九二、五〇三頁。なお、大島信は奄美大島龍郷村中勝の出身で、前述の大島仙蔵とともに鹿児島の本学校に学び、上京して駒場農学校を卒業後、当時は内務省属となっていた。後に彼は鹿児島第七区の吏党側の候補者となり、衆議院議員に当選する。
(106)前掲(4)③一八八頁。
(107)八月二十九日には、品川弥二郎の一行および西郷菊次郎・柏田盛文らが大口村で懇親会、さらに翌日加治木町で懇親会を開いたことが報じられている（「読売新聞」明治二十五年八月三十日）。
(108)四月九日の「読売新聞」には、過般総選挙時の菊次郎の吏党支持演説に対して民党が反発し、隆盛銅像の寄付金が集まらないとの記事があり、さらに翌年七月一日にも、予算の関係で騎乗像がつくれなくなったとの続報が掲載されている。
(109)「東京朝日新聞」五月五日。
(110)「読売新聞」七月五日。鹿児島県第六区補欠選挙の際、菊次郎が吏党の応援に尽力し、宇都宮東太に協力要請したとの記事がある。
(111)「読売新聞」明治二十八年三月十九日。

(112) 薩藩史料調査会編『鹿児島県政党史』薩藩史料調査会、一九一八、二三五頁。

(113) 台湾総督府檔案「元宜蘭庁長西郷菊次郎恩給請求ノ件」（『台湾総督府公文類纂』明治三六年永久保存　第一四巻、八一五―三文書）。

(114) ただし、竹之助も明治二十八年九月六日に病死する（JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C 06082169100、死亡賜金給与の件　明治二十八年坤「貳大日記九月」（防衛省防衛研究所））。

(115) 「産経新聞」二〇一八年九月十四日掲載の原口泉氏「今こそ知りたい幕末明治（73）」によれば、氏は新納久脩のご子孫から、菊次郎夫妻が明治二十七年より約一年四ヶ月間、新納家と養子縁組していた由を聞かれたとのことである。また「南日本新聞」二〇一八年九月十八日にはその新納家の戸籍が掲載されたが、そこでは「新納ヨシ」の養子と記載されている。新納喜兵衛の妻に当たる人物であろうか。記載の養子縁組とその解消の日付は、前掲の西郷家側の戸籍と合致している。

(116) 政戦記録史刊行会『大日本政戦記録史』政戦記録史刊行会、一九三〇、一五五頁。

(117) 前掲(4)③。

(118) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C 06061025300、式部官西郷隆準営口へ派遣の件　明治二十八年自四月十一日至五月二十二日（防衛省防衛研究所）。「ナンペウ」は台湾の地名とみられるが、どの地を指すのかは不明である。

(119) 台湾総督府檔案「府内部課長任命（牧朴真・島村久・橋口文蔵・伊澤修二・後藤松吉郎・千千岩英一）地方官任命」（『台湾総督府公文類纂』明治二八年乙種永久保存進退第一巻、四十二―三文書）。なお、この文書によれば、同じ参事官として、菊次郎と同時期のアメリカに滞在していた大久保利武がおり、また地方官任命者中には、菊次郎の第一回目の渡米に同行していた鮫島武之助の弟である鮫島盛、西郷糸子の妹竹子の夫である相良長綱、さらに樺山総督の甥である橋口文蔵らがみえる。

(120) 台湾総督府檔案「元民政局員西郷隆準外行賞稟申・高橋籐兵衛賞賜金御沙汰書請書送付」（『台湾総督府公文類纂』明治三十年乙種永久保存第四巻、一四九―二文書）。

(121) この菊次郎の安平出張所時代については、岡本真希子「植民地地方行政の開始と台湾人名望家層―統治体制転換期の台南地域社会」社会科学　四一巻四号、二〇一二、五三―八八頁に一部記載がある。

(122) 台湾文化三百年記念会編『台湾史料集成』一九三一、一八―一九頁に所収の「税関古文書綴」による。

(123) 台湾総督府檔案「西郷菊次郎外一名〔大鳥富士太郎〕参事官任命西郷菊次郎任命通知」（『台湾総督府公文類纂』明治二十九年永久保存進退第一巻之二、一〇三―二九文書）。なお、同年四月には「淡水支庁長西郷菊次郎殿」と書かれた文書もあり、すでに支庁長になっていたものと考えられる（呉泰寿「学事上申書」明治二十九年四月二十七日（檜山幸夫・東山京子編『伊藤博文文書　第三二巻』ゆまに書房、二〇一〇）一三三―一四九頁）。

(124) 黄紹恒「不平等条約下の台湾領有」社会経済史学　六七巻四号、二〇〇一、三―二一頁。

(125) 台湾総督府民政部土木局『台湾水道誌』台湾総督府民政部土木局、一九一八、九―一一頁。

(126) 前掲(125)、一六頁。

(127) 前掲(51)、二六三頁。前掲(125)、三五―六九頁。

(128) 前掲(125)、三五―六九頁。

(129) 芹澤良子「台湾一八九六年―日本の〈帝国医療〉の揺籃」（永島剛・市川智生・飯島渉編『衛生と近代　ペスト流行にみる東アジアの統治・医療・社会』法政大学出版局、二〇一七）六三―九六頁。

(130) 前掲(113)。

(131) 藤波潔「日本による領台直後期の台湾「外交」をめぐる問題」沖縄国際大学社会文化研究　七巻一号、二〇〇四、一―三五頁。

(132) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B 13080680600、6．在淡水英国領事館敷地移転ノ件　外国人ニ関スル事項及各国領事ト交渉事件等拓殖省ヨリ通知一件（外務省外交史料館）。

(133) 王鉄軍「近代日本文官官僚制度の中の台湾総督府官僚」中京法学　四五巻一・二号、二〇一〇、九七―三〇〇頁。

(134) 前掲(16)によれば、拓殖務省の部下であった曾根静夫が台湾総督府民政局長へ赴任し、その後も北垣とやりとりしていることなどがみえる。

(135) 小林丈広『近代日本と公衆衛生―都市社会史の試み』雄山閣、二〇〇一。小野芳朗『水の環境史　京の名水はなぜ失われたか』ＰＨＰ研究所、二〇〇一。

(136) 平山育男「バルトンによる明治二十八（一八九五）年の京都における下水道調査日程について」日本建築学会北陸支部研究報告書　五六、二〇一三、五七八―五七九頁。

(137)「京都日出新聞」明治四十年一月二十日。
(138)前掲(1)③。
(139)前掲(1)①、大森鍾一宛桂太郎書状、明治二十七年二月二十三日（「大森鍾一文書」東京大学近代法政資料センター所蔵）。
(140)前掲(42)。
(141)ファブルブラントは武器商・時計商として以外に、明治三十年代にはベルギーのリェージュ社の代理店として水道用の鋳鉄管を扱うようになっており、東京市の水道敷設に際して大倉組とともに大量の鋳鉄管を納入していることも興味深い（前掲(42)による）。
(142)「京都日出新聞」明治三十八年二月八・十五・二十四日。
(143)台湾総督府檔案「民政局事務嘱託川村鉚次郎外一名〔坂口宗之助〕兼勤所属命免ノ件」（『台湾総督府公文類纂』明治二十九年永久保存進退第六巻之二、一〇九―四文書）。
(144)その彼が南満州鉄道株式会社に引き抜かれ、明治四十一年に辞職した折、後任として大野盛郁を迎えるべく大野の説得に当たったのが、同じく台湾時代初期の同僚であった大久保利武であったことも付記しておきたい（「大野盛郁日記」明治四十一年十二月十一日条（京都市市政史編さん委員会編『京都市政史第四巻』、二〇〇三、二一五頁に所収））。
(145)前掲(1)③。
(146)西郷菊次郎談「京都を繁栄ならしむる策」商工世界太平洋　五巻二五号、一九〇六、一二―一四頁。
(147)国立公文書館、請求番号：任B00317100、「宜蘭庁長兼臨時台湾土地調査局事務官西郷菊次郎以下二名依願免本官並兼官ノ件」、任免裁可書・明治三十五年・任免巻三十二にある宜蘭医院長の診断書による。
(148)当時の「聖護院町」には、「上り畑」「出口」「圓頓美」「山王」「片木原」「東寺領」「蓮華蔵」「中川原」「西畑」の九つの小字があり、その範囲は現在の聖護院中町・聖護院西町・聖護院東町・聖護院東寺領町・聖護院圓頓美町・聖護院山王町・聖護院蓮華蔵町・聖護院川原町にまたがる広域に及んでいた。
(149)前掲(4)③。
(150)「大野盛郁日記」明治四十一年十二月十九日条（京都市市政史編さん委員会編『京都市政史第四巻』、二〇〇三年、二一六頁に所収）。

(151) 前掲(8)。

(152) 『人事興信録　3版』人事興信所、一九一一、さ八五―さ八六頁。

(153) 大正元年の京都地籍編纂所編『京都市及接続町村地籍図　第1　附録』によれば、聖護院町の字「上リ畑」に地番四四として二筆の宅地が記載されており、二三一坪の方は聖護院の所有地で、一三坪の地筆の方は京都市の所有となっている。これを同じく大正元年の京都地籍編纂所編『京都市及接続町村地籍図　第1』の地籍図上で確かめると、地番四四の二三一坪の宅地が、地番四五の聖護院門跡の北に隣接して描かれていることがわかる。借り上げ地であったという所伝から考えて、この聖護院所有の地筆が菊次郎邸番地の主要部分を占めるものであったことが推定される（もう一つの地番四四の一三坪の地筆については記載がないが、これに隣接する土地であったと考えられる）。法務局の現在の地番表記では、「字上リ畑四四」の辺りは、聖護院の敷地とあわせて「左京区聖護院中町一五」となっている。法務局所蔵の明治三十年代作成とされる旧公図でこの地をみると、「聖護院境内」と書かれた地筆に「一五」の地番注記があり、その北に接する位置に「一三」と書かれた別の地筆が存在する。「聖護院境内」の「一五」の文字は、「四五」の番号を二重線で打ち消した横に書かれていることから、その北隣の地筆「一三」がもとの地番四四にあたると推定される。そこでこの左京区聖護院中町の「一三」の地筆について、旧土地台帳によって明治期の状況を確認したところ、明治三十年代に最初の書き入れがなされており、その段階では表記はやはり「字上り畑四拾四番」であり、面積二三一坪で地目は宅地、所有者は聖護院であったことが確かめられた。したがってこの地が、明治四十三年の西郷菊次郎履歴書に記載の住所番地にあたると結論される。

(154) 「聖護院蔵聖護院境内図」（歴彩館所蔵、近藤豊撮影写真資料、一九七〇年七月二十五日撮影、写真番号８３４８）。なお、本図は聖護院所蔵文書目録の「第一三〇箱三五号（明治時代）聖護院境内指図（楮紙・着色・表紙あり）」に相当することを確認している。図中に年紀はないが、「税地」「除地」などの凡例表記は明治前期の様式である。また、宮内庁書陵部には明治十八年の山階宮居住のための修繕箇所を示す図が所蔵されているが、本図にも「新規建家」や建具の修繕箇所の記載がみられることから、これに近い年代のものと推定される。

(155) ただし、この茶室自体も昭和八年段階では京都帝大医学部助手の森堅志の住居として貸し出されており（森克己「六十年の思い出」（森博士還暦記念会『対外関係と社会経済』塙書房、一九六八）六〇六頁）、菊次郎の時代においても借家の一部を構成していた可能性は存在する。

(156) 原田良子「西郷菊次郎の京都邸宅（菊草の終焉地）について」敬天愛人　三六、二〇一八、一〇三―一一七頁。

(157) 文部大臣官房秘書課『文部省職員録』文部省、一九一六、一四〇頁に記載の後述の朝永三十郎の住所による。書簡では「市内聖護院御殿内西門入ル」とする例もみられる（『西田幾多郎全集　第一九巻』岩波書店、二〇〇六、三六九―三七二頁に所収の朝永宛西田書簡による）。

(158) 朝永陽二郎「少年のころの兄の思い出の断片―その環境を中心に」（松井巻之助編『回想の朝永振一郎』みすず書房、一九八〇）五五―六八頁。朝永陽二郎は三十郎の次男で、振一郎の弟である。

(159) 朝永振一郎「うれしい京ことば」（『朝永振一郎著作集1　鳥獣戯画』みすず書房、一九八一）五三頁。

(160) なお、前掲朝永陽二郎の引用文との関わりで、北殿および学問所を合わせても「間数が二十」には足りないことや、さらに一軒目の「平家建て」と対比されていることを考慮すれば、北殿の南に位置する小書院（一部二階建て）も「借家」の内に含まれていた可能性がある。

(161) 三十三間堂前に邸宅を建築中であった賀陽宮家は、明治四十五年四月から大正二年九月までこの北殿に仮寓している。借りていた建物を北殿とする文献①と、小書院も含める文献②がある（①京都市編『京都名勝誌』京都市、一九二八、二八八頁。②高市二「賀陽宮家と故大僧正」（藤井覺猛編『恭随老師』恭随老師追慕会、一九三八）五七頁）。

(162) 聖護院所蔵の明治期以降の文書群は、全てが未整理なのではなく、すでに一部調査され、整理・目録化されたものも存在する（『本山修験』誌上に連載された文書目録、および青谷美羽・長村祥知「聖護院近現代文書の調査について」本山修験二〇五号、二〇一七）。よって、そこから該当の史料名を指定して申請手続を取り、許可が下りれば閲覧は可能である。

(163) 旧箱番号一六八、「明治四十一年一月　仝四十二年十二月　本院収入帳」。

(164) 旧箱番号一六八、「明治四十四年一月　収入帖」、「従明治三十七年壹月ヨリ三十九年十二月中　本院収入簿」。

(165) 文部大臣官房秘書課『文部省職員録』文部省、一九〇四、一六二頁。『人事興信録　3版』人事興信所、一九一一、わ三四頁。

(166) 渡邊庸は西田幾多郎や坂口昂と親しかったが（坂口遼『ある歴史家の生涯』丸善出版サービスセンター、一九七八年、一八〇頁）、彼らは京都帝大での朝永三十郎の同僚であった。なお朝永の入居時、この西門北側の借家は「新役所」と呼ばれており、本来は寺務に関係する建物であったと考えられる（旧箱番号一六八、「大正二年一月　本院収入帳」四月の記載によ

る）。

(167) 「大阪朝日新聞」明治三十七年十月七日付の臨時市参事会の報道による。なお、十月十一日の京都市会では、年俸三〇〇〇円、舎宅料も含めた交際費一五〇〇円という形で可決されている（「大阪朝日新聞京都附録」明治三十七年十月十二日）。

(168) 前掲(4)③、一八〇頁。

(169) 賀陽宮家および朝永家がともに北殿だけでなく小書院も合わせて借りていた可能性のあることを勘案すれば、菊次郎邸も同様であった可能性が出てくる。

(170) 今年三月、菊次郎の家族写真がご子孫より龍郷町へ寄贈され、京都で撮影されたものと推定されている（「奄美新聞」二〇一八年三月二日）。そこに写っている建物は、明治前期の第1図と照合すれば、背後の四畳間の形状、回り縁の配置、柱間が、北殿を北側から見た間取りと一致していることに気づく。そこで筆者はこの旨を六月十六日に龍郷町教育委員会へ連絡し、写真原版を確認した上で、七月二十日に現地を視察した。現状では濡縁が室内に取り込まれ、四畳間と隣室との壁が取り払われるなどの改変を受けているが、建物の構造自体は旧状が保たれていることを確認した。今回、聖護院文書の裏付けによって北殿が菊次郎邸であったことが確定したため、この写真も北殿前での撮影と判断してよいと思われる。

(171) 前掲(156)論文では、「上り畑四四」の住所史料について、明治前期の第1図の枠外右下部分にあたる地筆（現在の積善院の敷地あたり）にも「四四番」との記載があることから、「登記簿の住所番地からのみで菊次郎邸を推定することはむずかしいことが判明した」としている。しかし菊次郎の同時代、この地筆にはすでに「四三番」の地番が当てられており（京都地籍編纂所編『京都市及接続町村地籍図　第1』一九一二）、「四四番」は北端の一ヶ所に限られることから、上記の考証手続きに問題はない。

(172) 聖護院蔵「天明八年当門仮皇居之図」（歴彩館所蔵、近藤豊撮影写真資料、一九七〇年七月二十五日撮影、写真番号８３９６）。

(173) 前掲(153)によれば、「この別世界の境内には建造物や庭園のほかに広場、草地、野菜とか草花とかが作られた畑、夏になると雑草がおい茂る広い桐畑などが」あり、また「庭は植え込み以外は広い芝生で、手入れがゆき届かず、雑草が混じっていた」（七〇頁）という。なお、桐畑は聖護院境内の東北部分にあり、賀陽宮の時代には「春さきになると、大妃宮が可愛い若宮や姫宮をつれて、塀内の桐畑へつくしを摘みに出られるのが見うけられた」とある（久松真一「学究生活の想ひ出」思

想　三七六、一九五五、九〇―一〇〇頁）。

(174) 菊次郎邸の番地表記に、建物本体のある「上り畑四五」の地番が用いられなかった背景には、この地筆が無税の官有地であり、ここで家賃収入を上げる形を避けたかった聖護院側が、有税の宅地であった北側の「上り畑四四」の地番をあえて充てた可能性もある。いずれにしても、「上り畑四四」は建物位置そのものではないが、園地までを含めた「邸宅敷地」ではあったことになる。

(175) 原田健編『原田助遺集』原田健、一九七一、一六三頁。南洲直筆の書を取り出していることから、自宅への招待であったとみてよい。

(176) 本井康博『新島襄の交遊　維新の元勲・先覚者たち』思文閣出版、二〇〇五、一八四頁。

(177) したがって同じく北垣の娘と結婚した田邊朔郎と下村は義理の兄弟にあたる。なお、田邊の仲人は榎本武揚であった。

(178) 高久嶺之介「新島襄と北垣国道」（伊藤彌彦編『新島襄全集を読む』晃洋書房、二〇〇二）三五―五六頁。

(179) 前掲(176)、二四〇―二四六頁。

(180) 渋沢青淵記念財団竜門社編『渋沢栄一伝記資料第三十五巻』渋沢栄一伝記資料刊行会、一九六一、五四七頁によれば、明治四十一年十一月十一日に京都において東洋平和協会が組織され、役員が選出されている。

(181) 青山霞村『同志社五十年裏面史』からすき社、一九三一、三七頁。

(182) 桐野作人『さつま人国記　幕末・明治編』南日本新聞社、二〇〇九年、八六―九〇頁。